

41753

教科書文庫

4
810
41-1934
200030 2020

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

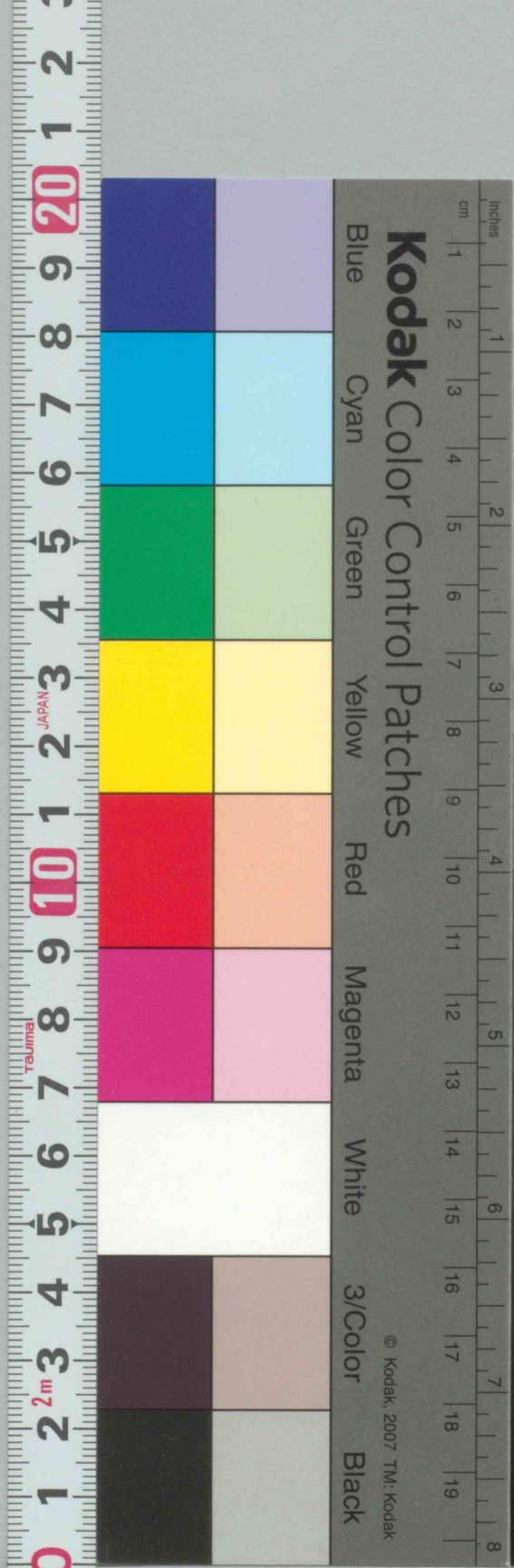


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
K06
資料室

標準問題

國文新鈔

教授資料

下篇

375.9
Kob

資料室

光風館編輯所編

標準
問題
國文新鈔教授資料 下篇

東京 光風館藏版

東京 光風館藏版

標準
問題
國文新鈔教授資料 下篇

光風館編輯所編



標準問題

國文新鈔教授資料

目次

下篇 現代文

雜鈔

一	詩は別才なり……………	一
二	英雄を以て兒女の情なしとす……………	五
三	舊雨の感……………	七
四	明治の朝廷に人あり……………	九
五	玉の御聲……………	一〇
六	我が國體の精華……………	二二
七	玉芙蓉……………	二三
八	一雙の清眸萬有より閉ぢぬ……………	二五
九	芭蕉は一俳人なり……………	二七
一〇	詩よりして神に之く……………	三〇
一一	成功の意義……………	三二

一二	頼家公の墓……………	三三
一三	まことによくこそ我は來つれ……………	三四
一四	風水相撃ちて波を爲す……………	三五
一五	忠孝兩全の歎……………	三六
一六	菅公の詩境……………	三六
一七	孔子既に志を魯に得ず……………	三〇
一八	天上の明月……………	三二
一九	その人によりて其の文を品す……………	三三
二〇	進歩の標準……………	三四
二一	永生の道……………	三五
二二	神相接せしむ……………	三七

目次

一

二三 鎌倉の覇府……………三六
 二四 太平愈續きて文化愈進む……………四〇
 二五 深山の奥の一本の櫻……………四三
 二六 平家物語はさながらの戯曲……………四七
 二七 悲劇的人物……………五〇
 二八 業平の歌……………五三
 二九 西行は生れながらの歌よみ……………五七
 三〇 俊成の詠するところ……………六一
 三一 権貴の家に生れたるもの……………六五
 三二 内部に待つもの……………六九
 三三 成敗と是非……………七三
 三四 言論の自由社會に存せず……………七六
 三五 二葉に籠れる力……………七九
 三六 無言の力……………八二

三七 大丈夫の覺悟……………六〇
 三八 批評……………六一
 三九 趣味饒なる人……………六三
 四〇 趣味の善悪は風俗の本源……………六五
 四一 人生は短し藝術は長し……………六八
 四二 吾等人間を救済するもの……………七一
 四三 藝術の士は貴い(一)……………七四
 四四 無聲の詩人無聲の畫家(二)……………七六
 四五 風は過ぎゆく人生の聲なり……………七八
 四六 穴を守るの蟹巢を忘るるの鴉……………八〇
 四七 風雅の嗜ある者……………八二
 四八 精神上の急須……………八四
 四九 時世の興廢……………八六
 五〇 社會は一個の活物なり……………八八

目次終

標準問題 國文新鈔教授資料

下篇 現代文

雜鈔

解題 雜鈔は現代文、即ち明治大正諸大家の代表的文章中から、鈔録したものである。之によつて
 ほとり諸家の文章の風格傾向を窺ひ知ることが出来る。 各作家の略傳は、逐次釋義の終に掲載。

一 詩は別才なり

「詩は別才なり。」といひ、詩人は生る、成るにあらず。といふは、東西一般の金言なり。今山陽の一生を考ふるに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるなし。その童歲に

當り、夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり。その父母を懷ふに厚く、その王室を懷ふに厚く、その忠臣義士を懷ふに厚く、情の熱するところ、常に冷かなるに勝ちたるは詩なり。その北馬南船行李卸さざるところなく、春花秋月遊屐遍からざるところなきは詩なり。その畛域を撤して諸



生を待ち禮貌を外にして王公に接するは詩なり。山陽の性格言行誰かこれを詩にあらすといはむ。

(朝比奈知泉)

〔別才〕〔金言〕〔童歳〕〔夙成〕〔老博士〕〔北馬南船〕〔遊履〕〔吟域を撤して諸生を待つ〕〔禮貌を外にして王公に接す〕

○海軍機關學校

○専門學校入學資格試験

要旨 頼山陽は、天成の詩才があつて、その性質・言行・著書等は、皆詩的であるといふことを論じてゐる。

釋義

〔詩は別才なり。〕といひ、「詩人は生る、成るにあらず」といふは、東西一般の金言なり。古人が「詩を作る才能は、特別のもので、たゞ才能があるから作れるといふものではない。」といひ、又「詩人は、その天才を具へて生れるもので（先天的のもので）、生後に學び努めたからとて、すべからず詩人になれるものではない。」といふのは、東洋に於ても西洋に於ても廣くいはれてゐる貴い語である。

〔詩は別才なり〕 滄浪詩話に「詩者別材也。非關書也。」とある

に據つたものである。

詩 自然の風景趣味又は人事の曲折波瀾、其他一切の事物に就ての感興・想像・經驗等を美妙な形式によつて敘述した詩章。簡單にいへば、志を述べる詩章。普通和歌に對して、漢詩をいふのであるが、茲では、單に漢詩といふ狭い意味ではない。

別才 特別の才能。

〔詩人は生る、成るにあらず〕 天才であつて、勉強工夫の及ぶ所でない事をいふ。英國の格言 “The poet is born, not made.” に據つた語である。

〔金言〕 貴重なことば。

〔今山陽の一生を考ふるに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、一として詩ならざるはなし。〕 今山陽の一生を考へて見るに、その性格といひ、その言行といひ、その著作といひ、何もかも皆詩的でないものはない。（即ち、その性格はいかにも詩人らしい性格であり、その言行はいかにも詩人らしい所があり、又その著した本を見ても、すべて詩的なものばかりである。）

〔山陽〕 頼山陽。安藝竹原の人。名は襄、字は子成、久太郎と稱する。父春水藝州侯に仕へて學名があつた。年十八、尾藤三洲の門に入り、文政七年菅茶山の塾に聘せられて塾生を督した。明年

去つて京都に出で、遂に留まり、天保三年、年五十八で歿した。著書には、日本外史・日本政記・通議・山陽文鈔・山陽遺稿・日本樂府等がある。（二四四〇—二四九二）

〔性格〕 氣づらる。性質品格。品性。

〔言行〕 ことばとおこなひ。いふこととすること。

〔著作〕 あらはしつくつたもの。著述物。

〔その童歳に當り夙成を以て老博士を驚かしたるは詩なり〕 山陽は子供の時分から、早くも學業に達してゐるといふことで、老功な學者柴野栗山を驚かせたのは、その詩である。

〔童歳〕 子供の時。

〔夙成〕 子供の時に早く學業などの成就すること。

〔老博士を驚かしたるは詩なり〕 山陽十三の時の元正に、「黃鳥啼晴日戰陽。辛盤遙拜向東方。霞關應侍春風座。曾否回頭憶故郷。」の七言絶句を作つて、江戸の邸にをつた父に贈つたところが、柴野栗山これを見て驚歎して、「春水子あり。」といつたところとである。江木鰐水の山陽先生行狀に「年甫十三、春水先生祇役と在江戶、作詩奇之。柴野博士見之、大加歎賞。曰、千秋（春水の字）有子、不教之爲實材、乃欲使爲詩人乎。宜使讀史知古今事、而史自通鑑綱目始。」とあるをいふ。

〔老博士〕 老功な學者の意。茲は、柴野栗山をさす。栗山は、

名は邦彦。讃岐高松の人。はじめ後藤芝山に學び、後、東遊して林大學頭に師事した。業成つて阿波侯に仕へ、京都に住んで、宋學を唱へた。五十三歳の時幕府に召されて昌平齋の教官となり、文化五年に歿した。年七十二。（二三九五—二四六六）

老 老功の意で、老いぼれた意ではない。

博士 茲は、ものしり、學者の意。

〔その父母を懐ふに厚く、その王室を懐ふに厚く、その忠臣義士を懐ふに厚く、情の熱するところ、常に理の冷かなるに勝ちたるは詩なり〕 又山陽は父母を懐ひ、皇室を懐ひ、忠臣義士を懐ふことが厚くして、その感情が高まつて來ると、これが爲にいつでも冷靜な理性をまげ、その感情は熱烈な詩として表はされた。

〔懐ふ〕 心を込めて思ふ、意。

〔忠臣〕 まごころを君國につくす家來。

〔義士〕 正義を守ることの極めて篤い人。

〔その北馬南船、行李卸さざるところなく、春花秋月、遊展遍からざるところなきは詩なり〕 又山陽は、東西の各地に絶えず旅行して、何處へ行つても暫く其の地に留まり、又春の花や秋の月と、季節々々の風物を愛賞して何處も彼處も巡り遊び、そ

してその旅情なり懐古の情なりをいひあらはしたのも矢張その詩である。

「北馬南船云々」 東西南北到る處に旅行して、旅行用の道具を入れた行李(荷物)を其處におろし、暫くでも滞在しない所がない、といふ意。

北馬南船 諸方に旅行する、意。支那の旅行は、北方は水利に乏しいので馬背によるし、南方は長江をはじめ水流の数が多いため船による事が出来る故に、かくいふ。

「遊履」 各地を巡り遊ぶ、意。

下駄 旅行に使ふはきもの。

【その吟域を撤して諸生を待ち、禮貌を外にして王公に接するは詩なり】 又山陽は、少しも先生がらず同輩に對すると同じ態度で、諸學生を待遇したり、禮儀をかまはないで高貴の人につきあつたのも、詩的である。

「吟域を撤して諸生を待ち」 師としての威嚴をもたないで、同輩として門弟に接するをいふ。

吟域 吟は、井田の開の陌、即ち田圃の小路、故に「吟域」は、界、茲は、師弟の界を取りはらつて、隔意なく接するをいふ。山陽醉餘に乗じ、時に戯に自ら外史を講じたことがあり、又手拭をもつて鉢巻をなし、はたきをもつて采配となし、且つ説き且つ揮ひ、

殆ど講釋師の觀があつたといふことであるが、これ等も吟域を撤して諸生を待たつたことの一つであらう。

「禮貌を外にして王公に接す」 禮容を修めないで(禮式に拘泥しない)、高貴の人に交際するをいふ。嘗て日野大納言が、都下の諸儒を招いた。山陽も亦招かれたが、固辭して應じないでいふには、「野人禮にならず、もし野服の出入を許し、贈與の際臣禮に類するなくんば、敢へて命を奉ぜん。」と。大納言之を許した。諸儒聞きてその傲慢を議したので、山陽書を作つて宴に赴くを辭した。辭ますく不遜である。大納言ますくその不屈を愛し、爾後獨り之を招きて宴を賜はつた。蓋しこの類のことをいふのであらう。

【山陽の性格・言行、誰か詩にあらすといはむ】 かう見てくると、山陽の性格や言行が、誰か之を詩的でないといはうか、詩的でないといふ人はあるまい。

「誰かこれを詩にあらすといはむ」 呼應の反語。それ故、下に「いはざるべし」の語意を補つて解くがよい。

【朝比奈知泉】 評論家。名は知泉、號は確堂。文久三年水戸に生まる。東京大學に入り、政治・經濟の學を修め、秀才の譽があつたが、在學二年で退學した。明治二十一年に「東京新報」を發

刊し、二十五年に「東京日々新聞」の主筆となつた。最も議論文に長じ、其の文精勁雄大である。三十八年に其の主筆を辭した。かつて歐洲へ漫遊し、大陸の事情に精通してゐる。(二五二二) 【本文の引用書】 今世名家文鈔。一冊。現代の名家の文を、一二篇づつ鈔録したもので、中には漢文も交つてゐる。明治二十四年、民友社發行。

備考

本文を解するに當つて注意すべき事は、詩といふ語が、いろ／＼の意味に使はれてゐるといふことである。

- (一) 一として詩ならざるはなし——詩的でないことはいはむ。
- (二) 驚したるは詩なり——その詩である。
- (三) 勝ちたるは詩なり——その感情は詩としてあらはされた。
- (四) 遊履……詩なり——いひあらはしたのはその詩である。
- (五) 王公に接するは詩なり——その態度は詩的である。
- (六) 誰か詩にあらすといはむ——誰も詩的であるといふ。

二 英雄を以て兒女の情なしとす

雜鈔 二英雄を以て兒女の情なしとす

世或は月照の死に對して、西郷を議する者ありといへども、我を以て之を見るに、唯、その跼天踏地の志士を憐むの情に堪へず、之を救ふの道なきがために、自ら亦死を決して共に海に投じたるに過ぎず。漫りに揣摩臆測を逞しうして種種の言議を挟むが如きは英雄を以て兒女の情なしとするの妄に坐す。(尾崎行雄)

【跼天踏地】 【揣摩臆測】 【言議を挟む】 【兒女の情】 【妄に坐す】

○北海道帝國大學豫科

要旨 「西郷隆盛論」の一節で、西郷隆盛が月照と共に入水したのは、全く月照に同情する念に堪へなかつた結果であるといふことを論じてゐる。

釋義

【世或は】 世間には、どうかすると、の意。

【月照の死に對して】 僧月照が西郷隆盛と共に海に投じて死ん

だ事について、の意。

【月照】京都清水寺の僧。勤王の志深く、西郷隆盛と兄弟の交を結ぶ。後幕吏に追跡され、西郷と共に九州に奔り、安政五年十一月相抱いて薩摩湯に投じ、西郷は助かり、月照は水死した。年四十六。明治二十四年正四位を贈られた。(二四七三—二五一八)

【西郷を議す】西郷の行爲をかれこれと論じて非難する。

西郷 西郷隆盛。明治維新の元勳。幼名吉之助、南洲と號する。鹿兒島藩士。幕末、僧月照・平野國臣・藤田東湖等と討幕の事を謀り、又藩政に參與して長藩の間に成を行つた。明治元年總督府參謀として東征し、幕臣勝安芳と相見えて、江戸の開城を受け、進んで奥羽北陸に轉戦して功あり、正三位に叙し、陸軍大將兼參謀となつた。六年征韓論を唱へて、議容れられず、官を辭して郷に歸り、私學校を設けて薩摩の子弟を教養した。十年春私學黨に擁せられて兵を擧げ、熊本城を圍みて勝たず、鹿兒島に退き城山に自殺した。二十二年正三位に復せられ、三十五年庶子寅太郎氏、父の前功を以て侯爵を賜はり華族に列した。(二四八七—二五三七) 議す 非議する、意。

【我を以て之を見るに】私の意見をもつてこの事を考へると。私の意見では。

【唯、その跼天躋地の志士を……海に投じたるに過ぎず】

西郷が月照と共に海に投じたのは、外に理由があるのではなく、單にこの天地間に身をおくに所のない志士である月照を氣の毒と思ふ情をおさへることが出来ないで、月照を助けたと思つたが、助ける方法がない爲に、自分も亦死ぬ決心をして、月照と共に投身しただけのことである。

「陽天躋地」甚だ恐れて身のおきどころのないさま。天にせぐぐまり、地にぬきあしすること。即ち、頭が天に觸れることを恐れて背を屈めて行き、地のくぼむことを恐れてぬき足で歩くことをいふ。

「志士」國家社會の爲につくさうとする志のある人。茲は、月照を指す。

「之を」月照を。

【漫りに揣摩臆測を逞うして……兒女の情なしとする妄に坐す】然るにむやみに、自分勝手な推量を思ふまゝにして、さまざまの議論を持ち込んで非難するやうな者は、英雄の半面に、女子や子供のやうなやさしい情(月照と共に水死を遂げようといふ情をさす)が、無いものであると思ふやうな無茶な判断をする罪に問はれるものである。

「揣摩」自分勝手な推量。

「臆測」真相を究めないで、よい加減な推量をする事。

「逞しうして」思ふまゝにする。

「言議を挟む」その事に口を入れて議論する。

「英雄を以て兒女の情なしとする」英雄の半面には、女子や子供のやうなやさしい情がある筈であるのを、さういふやさしい情がないものであると思ふ、の意。

【兒女の情】 茲では、兒女のやうなやさしい情、の意にとるべきで、兒女のやうなあさはかな情、の意ではない。

(此の意味をさとることによつて、西郷が月照と水死を遂げようとしたのは、やさしい情によるのであるとして、世の非議をゆるめた作者尾崎氏の眞意がわかるのである。)

【妄に坐す】無茶な判断をする罪に問はれる。

妄 であらめ。勝手な評。無茶な判断。妄言・妄評。坐す 罪にとはれる。罪せられる。

【尾崎行雄】政治家。安政六年伊勢に生まる。はじめ學堂と號し、後、愕堂と改めた。少にして慶應義塾に入り、卒業後、新聞記者となり、二十二歳の時新潟新聞主筆となる。時の大藏卿大隈重信、此を擯きて、統計院權少書記官となした。明治十四年大隈伯の桂冠と共に野に下り、改進黨の組織に盡力し、又報知新聞社に入りて末廣重恭を助けた。井上伯の條約を改正しようとするや、その不利を論難して已まなかつたので、遂に退去を命ぜられた。

かくて程なく歐米漫遊の途に上り、二十二年歸朝。二十三年帝國議會開設以來、常に三重縣選出議員である。三十一年憲政黨内閣に列して文部大臣となり、ついで内閣の瓦解と共に又野に下り、東京市長松田秀雄の歿するや、その後を承けて市長となつた。著書には、尙武論・少年論・經世偉勳・新日本等があり、その作多く停堂集に收められてゐる。(二五一—一九)

三 舊雨の感

曩に君の故山に歸養せしより、久しく其の警致に接することを得ざりしかど、舊雨の感豈一日も有朋の懷に往來せざらむや。圖らざりき、一旦滄桑の變に遭ひて、ここに君と旗鼓の間に相見ゆるに至らむとは。(山縣有朋)

【故山】(歸養す)【警致に接す】【舊雨の感】【圖らざりき】

【一旦】(滄桑の變)【旗鼓の聞】

○海軍機關學校

要旨 山縣有朋の西郷隆盛に送つた手紙の一節であ

る。

釋義

【曩に君の故山に歸養せしより、…ここに君と旗鼓の間に相見ゆるに至らむとは】 さきにあなた(西郷隆盛をさす)が、郷里鹿兒島に歸つて休養せられてから後は、久しくお目にかゝることは出来ませんでしたけれども、舊友を思ふ心は、一日として、私(山縣有朋)の胸中に起らない事はありませんでした。然るに、この度このやうな大事變に出會ひまして、今あなたと敵味方に分れて戦場で御會ひするやうにならうとは、全く思ひも寄らないことでした。

【故山】 故郷。茲は、鹿兒島をさす。
【歸養す】 歸つて休養する。
【醫欬に接す】 面會する。
【醫欬】 せきばらひ。

【舊雨の感】 舊友をなつかしく思ふ情。

【舊雨】 舊友、の意。「雨」と「友」とは音が通ずるからかくいふ。杜甫詩山序の「臥病長安旅次多雨。尋常車馬之客、舊雨來、今雨不來。」から出た語。

【圖らざりき】 思ひがけがなかつた。意外であつた。茲は、「相見

ゆるに至らむとは、圖らざりき。」の倒置法である。

【一旦】 一たび。この度、の意にとる。

【滄桑の變】 世の大事變をいふ。葛洪神仙傳の「見東海三變爲桑田。」から出た句で、本來は、滄海が變じて桑田となる、といふ意で、世の中のうつりかはりのはげしいことにいふ。「桑滄の變」ともいふ。之は、桑田が變じて碧海となる、の意であるが、喩へるところは同じである。

【旗鼓の間に相見ゆ】 敵味方となつて、戦場で相會ふこと。

【山縣有朋】 陸軍大將。元帥。舊山口藩士。天保九年、長州萩に生まる。幼名狂介、含雪と號する。吉田松蔭の門下で、幕末に當つて、大いに國事に奔走した。幕軍の長州征伐の舉あるや、高杉晋作等と共に騎兵隊を率ゐて遊撃し、大いに之を破つた。戊辰の役、越後口に向つて功があつた。明治六年陸軍卿に任じ、十年西南の役には征討參謀として出征して功があつた。十六年内務卿に任じ、十七年伯爵に叙せられた。二十二年内閣總理大臣に任ぜられ、翌年陸軍大將に進んだ。二十七八年戦役には、第一軍司令官として出征し、功を以て功二級に叙せられ、侯爵に陞つた。三十一年元帥府に列した。同年より三十二年迄、總理大臣であつた。三十七八年戦役には參謀總長であつた。役後、功一級に叙し、公

爵を授けられた。其の後、樞密院議長となり、大正十一年歿した。年八十五。其の著に、葉櫻日記がある。(二四九八―二五八二)

四 明治の朝廷に人あり

故右府公は、搢紳有職の家に生ひ立ち給ひしかど、夙に大勢を達觀して、王政に公武の別なきことを看破し、中興の實を擧ぐるために、神武の古に復るといへる一大義を唱へ給へるは、これぞ明治の朝廷に人ありと申すべき。この一大義は百揆庶政の原動力となりて、藤原氏以來千餘年間の盤根錯節をば總て破竹の勢を以て破りたり。(井上毅)

【右府】 【搢紳】 【有職】 【達觀】 【公武】 【中興】 【百揆】 【盤根錯節】 【破竹の勢】

○千葉醫學專門學校

○專門學校入學資格試験

要旨 故右大臣岩倉具視公の王政復古についての大功を記してゐる。

釋義

【故右府公は、…總て破竹の勢を以て破りたり】 故の右大臣岩倉公は、公卿であつて故實家でもあつた家に成長なされたけれども、早く我が國の大體の情勢を見通して、天皇の政治を行ふのに、朝廷と幕府との區別を立てる必要のないことを見抜いて、衰へてゐる朝廷の氣運を興す實效を現す爲に、天皇の親政であつた神武天皇の古の政治に復るといつた一大道を唱へなされた事は、これが明治の朝廷に大人物があつたと申すことが出来る。この一大道は總ての政治や諸の政務を行ふ根本の力となつて、藤原氏が天下の政權を握つてからこの方千餘年間の入り組んだ困難な政治上の事柄は、すべて竹を割るやうな烈しい勢で破り拂つた。

【故】 亡くなつたこと。死んだこと。

【右府】 右大臣の異稱。茲は、岩倉公をさす。

岩倉公 贈正一位岩倉具視。堀河前中納言康親の第二子。岩倉具慶に養はれた。維新の當初から討幕勤王の志を持ち、復古の事に盡瘁した。維新の業成るに及んで、議定となり、右大臣に任じ、特命全權大使として歐米諸國を巡歴し、條約改正の事を謀つた。歸朝後、大久保利通等と共に、新内閣を組織した。明治十六年

症にかゝり、その年の十月二十日に薨じた。年五十九。朝廷太政大臣を追贈し、葬るに國葬を以てした。(二四九八―二五四三)

【指紳】公卿。指は、挿、指は、大帶。笏を大帶にさしはさむ義から、公卿をいふ。指は、一に「指」に作る。

【有識】イウシヨク 故實の例式(朝廷又は武家の禮式典故)などに明らかな人。又、その家柄。故實家。

【遠觀】一小局部だけに偏せず、廣く大局を觀察すること。

【公武】公家即ち朝廷と、武家即ち幕府。

【中興】興る氣運に中ること。

【百揆】庶政を揆り度る官、又は、百官、の義であるが、茲では、總ての政治の意。

【庶政】もろ／＼の政。諸般の政治。萬機。

【盤根錯節】わだかまつた木の根や、入り組んだ木の節、の意で、處置困難な事に喩へていふ。

【蟻】蟻に通じて用ひる。

【破竹の勢】刃物で竹を破るやうに、とめどなく進む盛な勢。晉書杜預傳に「今兵威已振。譬如破竹、數節之後、皆迎刃而解。」

【井上毅】法政家。舊熊本藩士。弘化元年に生まる。幼名久馬。梧陰と號する。學を好み、木下犀潭の門に入り、俊才の名があつた。明治三年東京に出で、司法省に奉職し、江藤新平に隨つて歐洲

に航し、又臺灣事件に關して大久保利通に從つて清國に使した。累進して法政局長官となり、法律の起草・改正に關して功勞が多かつた。殊に帝國憲法の草案は、伊藤公の命をうけ、自ら筆を執つて草案し、伊藤・金子兩人を合せて、辯難討究したものであるといふ。樞密顧問官を經、明治二十六年文部大臣となり、國語・國史を奨勵し、國家主義の教育を唱へた。二十八年華族に列して、子爵を賜はり、尋いで薨去。年五十二。著書に梧陰存稿がある。(二五〇四―二五五五)

【本文の引用書】梧陰存稿。一冊。井上梧陰の遺稿集。

五玉の御聲

明治時代の詔勅は森嚴雄大、永く國史を照らして、後世の國民に聖代を語り、典範を示すものである。併し詔勅にはそれぞれの形式があり、聖意を承けて起草する人のあることも明白である。御製は直ちに大御心の發したもので、之を拜誦するものは、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで日日玉の御聲を拜聽するの光榮を

有するのは、實に我が國民の特殊な幸福であるのである。(芳賀矢一)

- 【森嚴雄大】「國史を照らす」【典範】【御製】【直接に】【玉の御聲】【拜聽す】【草莽の微臣】
- 廣島高等師範學校

要旨 明治時代の詔勅の尊いこと、及び御製を拜聽する我が國民の幸福なことを述べてゐる。

釋義

- 【森嚴雄大】 おごそかで勇ましく大きい。
- 【國史を照らして】 我が國の歴史に輝き渡つて、の意。
- 【聖代】 すぐれた天子の御代。「聖世」に同じ。
- 【語り】 告げ知らせ、の意。
- 【典範】 手本。「模範」と同じ。
- 【形式】 作り方の形式。
- 【聖意を承けて】 天皇の御思召を承つて。
- 【起草する人】 文の草稿を作る人。
- 【御製】 天子の作りたまへる詩歌文章をいふ。「聖制」ともいふ。

- 【即ち直接に】 直に手近く、の意。
- 【玉の御聲】 天子の御聲。又、美しい聲。茲は、前者。
- 【拜聽するのである】 讀んで聽くわけである。
- 【草莽の微臣】 民間に居る賤しい人民、の意。
- 【草莽】 もと、草深い處、の義から出た語。
- 【光榮】 名譽。

【芳賀矢一】 國文學者。文學博士。舊福井藩士芳賀眞咲の男。慶應三年福井市に生まる。明治二十五年東京帝國大學文科大學を卒業し、大學院に入り、二十七年第一高等學校國文科教授を託せられ、翌三年同校教授兼高等師範學校教授となり、三十一年東京帝國大學文科大學助教授、ついで教授に進み、高等師範學校教授を兼ね、三十三年文學史攻究法研究の爲、獨逸に留學を命ぜられ、柏林大學に學び、それから英佛を巡遊して、三十五年に歸朝した。爾後帝國大學にあつて専ら國文學の講座を擔當した。四十四年、文藝院委員を仰付けられた。晩年國學院大學に長となり、昭和二年に歿した。年六十一。その著に、新撰帝國史要・世界文學者年表・國文學史十講・國學概論・明治讀本・明治文典・國民性十論・歷代國文選・日本家庭百科事彙・月雪花・筆のまに／＼等がある。(二五二七―二五八七)

【本文の引用書】筆のまに〜。一冊。文學・世事等の隨筆書である。

六 我が國體の精華

祖先崇拜の大義は、血統團體を構成し維持する原因たると同時に、血統團體の存続は亦祖先崇拜の大義を鞏固にし深遠にする効果あり。二者相待ちて消長し須臾も離るべからず。而して我が固有の國民道德たる忠孝友和信愛の道は、一に皆祖先崇拜の大義に淵源し、血統團體を保持する軌轍たり。我が堅固なる國家の體制は、祖先教の上に立つ。之を千古に維ぎ、萬世に傳ふるは、我が民族の特質にして、我が國體の精華たる所なり。

(穂積八束)

【祖先崇拜】 【大義】 【血統團體】 【鞏固にす】 【消長す】 【須臾】 【淵源】 【軌轍】 【體制】 【祖先教】 【精華】
○小樽高等商業學校

【要旨】 祖先崇拜の大道は、我が國體の基礎であり、並に長所であるといふことを説いてゐる。

釋義

【祖先崇拜の大義は、…我が民族の特質にして、我が國體の精華たる所なり】 我が國の美風である祖先をあげたつとぶといふ大精神は同じ血統を以て結びつけられた日本民族といふ團體を造り之を永く存続させる原因であると同時に、此の血統團體が永く續くことは亦祖先崇拜の大精神を強く固く且つ深くする効果がある。かういふわけで此の二つのものは何時も結びついて、衰へもすれば盛んにもなり、暫くも離れることの出来ない關係にある。さうして我が國に昔からある獨特の國民一般の道德である君に忠を盡すとか、親に孝を盡すとか、同胞相信し相親しむとかいふ精神は、全く皆祖先崇拜の大精神に源を發し、日本といふ血統團體を永く存続させる大本となつてゐるのである。我が基礎の固い國家の組織は、祖先教、即ち、祖先の靈を祭り尊ぶ宗教の上に成立つてゐる。之を永久に保持し、永久に傳へることは、我が大和民族の特別の性質であつて、我が國體の美點であるものである。

【祖先崇拜】 先祖の靈を崇め尊ぶこと。

【大義】 普通は、君國に對する國民の義理といふ意に用ひられるが、茲では、大精神の意に用ひてある。

【血統團體】 同血統の集合體。同じ血統を以て結びつけられた團體。日本民族は同一血統を以て結びつけられてゐる。

【消長す】 盛衰すること。

【須臾】 しばらく。

【淵源】 起り。起原。

【保持する】 保持する爲の、の意。

【軌轍】 もと、車のわだち(車の跡)の義であるが、法則、の意に轉用する。茲は、道又は大本の意にとつたがよからう。

【體制】 「組織」といふに同じ。

【祖先教】 祖先の靈を祭り尊ぶ宗教。

【立つ】 成立つてゐる、の意。

【精華】 美點のこと。

【穂積八束】 法學博士。帝國學士院會員。舊宇和島藩士。陳重の弟。明治十二年東京帝國大學政治學科に入學。十六年卒業。翌年獨逸に留學、公法學を修め、在學四年。歸朝後、東京帝國大學法科大學教授に任じ、三十年法科大學長に補せられた。後、樞密院書記官を兼ねた。嘗て、法典編纂・帝室制度取調委員となり、後

又、貴族院議員に勅選せられた。憲法大意・行政法大意、其の他の著がある。大正元年十月歿。年五十三。(二五二〇―二五七二)
【本文の引用書】 愛國心。一冊。忠順・愛國・奉公・遵法等の國民道德を説明した書である。

七 玉芙蓉

傳へ言ふ、孝靈帝の御宇、東海の氣漸く清明に、始めて不二の高嶺を中霄に見たり。と。斯の山古來秀でて靈あり。頂は分れて八峯を成し、其の雪を戴くが爲に宛も玉芙蓉の如し。山容巍然仰げばいや高く望めばいや尊し。歌仙も其の高き狀を歌ひ盡すこと能はず、畫聖も其の尊き態を畫き盡すこと能はず。岳神は容易に祕奥の符を示さずして、唯、人の獨詣して冥契を得るに任せ、三千年にして一人之を歌ふものあり、五千年にして一人之を畫くものあるを俟つのみ。(運探金太郎)

【中霄】 【靈】 【玉芙蓉】 【巍然】 【祕奥の符】 【冥契】

○東京高等工業學校

要旨 富士山の山容、及び其の姿の高大で尊嚴な趣があるといふことを記してゐる。

釋義

【傳へいふ】孝靈帝の御宇、……五千年にして一人之を畫くものあるを俟つのみ。「我が第七代孝靈天皇の御代に、東海地方の氣がだん／＼清く明らかになつて、始めて富士の高山を中空の間に見る事になつた。」と言ひ傳へてゐる。この富士の高山は、昔から秀ですぐれた趣があつた。その山の頂上は分れて八つの峰を成し、その雪を戴いてゐるために、丁度白く美しい蓮の花のやうである。山の姿が高大であつて、仰いで見ると、ます／＼高く、眺めて見ると、ます／＼高い感じがする。歌の名人でも、その高い有様を十分に詠みあらはすことが出来ない。畫の大家でも、その高い姿を十分に描きあらはすことが出来ない。山の神靈は容易に秘密の真相を示さないで、たゞ人が獨りこの山に參詣して、神の秘密を悟ることに任せて、三千年ほどの間に、一人でもよく其の趣を歌に詠みあらはす者があり、五千年ほどの間に、一人でもよく其の姿を畫に描きあらはす者のあるのを俟つてゐるばかりである。

「傳へ言ふ」倒置法。普通では、「孝靈帝の御宇、……中霄に見たり。と傳へ言ふ」とあるべきである。

「清明に」清く明らかになつて、の意。

「中霄」中空。

「不二の高嶺」富士の高山。

嶺「根」とも書く。

「靈あり」すぐれた趣がある。

「玉芙蓉」美しい蓮の花。普通、富士山を芙蓉峰といふのは、蓮の葉の形からいふのであるが、茲は、山上の白雪を白い蓮の花に喩へたのである。

「山容巋然」山の姿が高大であつて、の意。

巋然 山などの高大な有様にいふ。

「歌仙」歌の名人。

「畫聖」畫の大家。

「秘奥の符」秘密の真相。

符 もと、神符で、神の守札、の義。

「冥契」「默契」と同じで、秘密のこと。もと、無言の間に心の一致すること。

「俟つのみ」この下に「なり」の語を補つて解くべきである。

俟つ 自然に来るのをまつ、の意。

【遅塚金太郎】文章家・新聞記者。麗水と號する。明治二年駿河國沼津町の在、小諏訪に生まる。都新聞記者となる。小説にも筆を染めたけれども、その長所は寧ろ紀行文にあるやうである。その著の主なもの、日本名勝記。松島遊記。ふところ硯。露分衣等である。(二五二九)

【本文の引用書】日本名勝記。二冊。日本名勝の紀行書。

八一雙の清眸萬有より

閉ぢぬ

あはれ我が友、あさましようも打衰へたるかな。昨日までも光榮の華冕打翳して曙の歌勇ましかりし雄姿、今何處にか認むべき。昂かりし頭は俛れ、麗しかりし冠は折れて燃えのぼる満身の炎に、土の如き黝色傷ましく、嵐を嘲りし兩翮は萎みて影の如く、敵を挫きし爪嘴は拳曲して力なし、生氣光澤人に迫るの力ありし渾身の羽毛は、空しく枯葉を束ね、一雙の清眸は全く萬有より閉ぢぬ。昂

雜鈔 八一雙の清眸萬有より閉ぢぬ

然闊歩せし疇昔の姿永へに庭上に消えて、唯、見る、

衰殘の孤影蹣跚たり踰踰たるを。(綱島榮一郎)

「あさましようも」〔光榮の華冕〕〔曙の歌〕〔燃えのぼる満身の炎〕

「黝色」〔嵐を嘲りし兩翮〕〔影の如し〕〔拳曲〕〔生氣〕

「渾身」〔空しく枯葉を束ね〕〔一雙の清眸は全く萬有より閉ぢぬ〕

「昂然闊歩す」〔曙昔の姿〕〔衰殘の孤影〕〔蹣跚〕〔踰踰〕

○仙臺高等工業學校

要旨

我が家に飼はれてゐる鶏の最後の傷ましい有様を述べたもので、當時病める作者の感傷は嗚かしてあつたらう。本文は、單語の意よりも句意を十分に會得させるやうに注意せねばならない。

釋義

【あはれ我が友、あさましようも打衰へたるものかな。……唯、見る、衰殘の孤影、蹣跚たり踰踰たるを】 あゝ我が友なる鶏よ、お前はまあなげなくも衰弱したものであるなあ。昨日までは光榮ある花の冠ともいふべき立派な鶏冠をいたゞき、明方には勇ましい聲で鳴き立てて居たその雄々しい姿、それは今何處に

認めることが出来ようぞ、今はもう全く見る事が出来ない。高く元氣さうにさくづけて居たその頭は垂れ、美しかった鶏冠は折れてだらりと下り、全身をこがすやうなひどい熱の爲に血の氣は失せて體の色は青黒くいたましいやうに見え、どんなひどい嵐にもびくともしないで廣げることが出来た強い翼はちぢかんで影のやうで、少しもいづかりした所がなくなり、敵を挫いた爪や嘴は曲つて力がない。生々として美しい光澤があり、人をしてなるほど立派である強さうであると思はせた全身の羽毛は、まるで枯れた葉を束ねたやうになつて勢がなく、この世の萬物を見て居たその清い眸は、二つとも閉ぢてしまつた。得意になつて大股にゆつたりと歩いて居た前日の姿は、永久に庭に見ることが出来なくなつて、今はただ弱りはてた寂しい姿の、よろ／＼とよろめいて居るのを見るだけである。

「わが友」 わが愛する鶏よ、の意。此の友の何であるかといふことは、生徒に考へさせるがよい。

「あさましろも」 情なくも。

「打衰へたるかな」 打は、接頭語。

「光榮の華星」 鶏のとさかの花やかなことを喩へていつたのである。華星、花のかんむり。

「曙の歌勇ましかりし」 鶏が明方に勇ましく鳴き立てることをいふ。

「麗しかりし冠」 これも鶏冠をいふ。

「燃えのぼる満身の炎」 熱病の熱の非常に高いことを喩へていつたのである。

「黝色」 青黒い色。

「嵐を囀りし」 はげしい嵐に對してもびくともしないで鳴いた、の意。

「兩翮」 兩方の羽。兩翼。

「影の如く」 影は、實體がなく、たゞ日光によつて、假に生じたものである。それ故、此の句は、力なく、あるかなきかに見えるのを形容していふ。

「蓋曲」 まがる。

「生氣」 いき／＼した様子。

「渾身」 全身。

「枯葉を束ね」 枯れた葉を束ねたやうに、かさ／＼になつた様子をいひあらはす。

「一雙」 二つ。

「清眸」 清いひとみ。

「全く萬有より閉ぢぬ」 萬有は、あらゆるもの。眸があると、萬

九 芭蕉は一俳人なり

有の姿がうつるが、眸が閉ぢてしまふと、何もうつらなくなり、即ち何も見えなくなる。そこで、茲は、死んでしまつた爲に、最早何物をも見ることが出来なくなつた、といふ意。

「昂然」 得意なさま。

「闊歩」 ゆつたりと大またに歩く。他を眼下に見下して威張つて歩くことにいふ。

「鳴音」 前日。

「唯、見る、云々。」 倒置法。

「衰殘」 よわりはてる。

「孤影」 さびしくあはれな姿。

「蹣跚」 よろめくこと。

「蹢躅」 よろめくこと。

【綱島榮一郎】 思想家。梁川と號する。備中の人。早稻田専門學校を卒業し、倫理學者として聞えたが、明治二十九年、肺患にかかり、爾來殆ど病床に在つたが、尙研究を怠らず、文筆に親しんだ。明治四十年に歿した。年三十五。著書には、西洋倫理學史・快樂派倫理學史・梁川文集・病閑錄・回光錄等がある。(二五三三—二五六七)

【本文の引用書】 病閑錄。一冊。病閑の感想錄である。本文は、苦痛と解脱(病鶏を傷みて)の一節である。

芭蕉は一俳人なり。されど五十年の生涯を自然の渴仰にささげて、或は奥羽象潟の時雨に腸を絞り、或は佐渡北海の荒海に魂を削りて、一樹の假の宿りにも、とくとくの零結びもあへず、旅魂そぞろに枯野の風雲を追へりし彼が姿をしのぶもの、誰かその魂に鑄られたる實の一字を否むべき。彼は自ら謙して花鳥に情を役して此の一筋にかかるといへり。しかも行行しはば大自然の幽玄の一路に分入りて、覺えず涙下りしその意識よ。あはれ彼は趣味の門より入りて、趣味の太原に道交しぬ。(綱島榮一郎)

【自然の渴仰】 「腸を絞る」 「一樹の假の宿り」

【とくとくの零】 「旅魂」 「枯野の風雲を追ふ」 「實の一字」

【自ら謙す】 「花鳥に情を役す云々」 「幽玄」 「太原」 「道交す」

○神戸高等商業學校

○彦根高等商業學校
○滿洲教育專門學校

要旨 俳人芭蕉の精神が眞實であつて、趣味の本源に達したことを論じてゐる。

釋義

【芭蕉は一俳人なり。……あはれ彼は趣味の門より入りて趣味の大原に道交しぬ】芭蕉は一俳人に過ぎない。けれども五十年のその生涯は、自然の美を仰慕して之を歌ふために費され、或時は奥羽の象潟に旅してその時雨の物さびしい景色をうたひ、或時は北陸に旅して北海の荒海の空、佐渡に横たふ天の川の景を眺めて寂しい句をのこし、たま／＼旅の宿に暫くおちついて、すぐ又旅に浮かれ出たが、かうして最後まで、自然を愛する心から、何故ともなく只もう枯野の景色（自然の風光）をたづねて歩きまはつた彼の風姿を思ひ出す者は、誰でも彼の心の中に眞實といふことが刻まれてゐたことを認めるに相違ない。彼は自ら謙遜して、自分は花鳥風月の爲にのみ心を使ひ、たゞこの風雅の道にかかはつて、暮して居るのであると云つてゐる。しかし旅行中度々偉大な自然の妙趣に觸れて、感極まつて思はず涙を流したその心

こそ如何にも尊いものである。さて／＼彼は趣味の門から入つて趣味の本源に達したのである（全く趣味に徹底したものである）。
【五十年の生涯】芭蕉は元祿七年に、年五十一で歿した。本書中篇奥の細道鈔の**解題**を参照されたい。
【自然の渴仰】自然の美をしたひほめて、之に没入してしまふことをいふ。
【奥羽象潟の時雨に云々】奥の細道（芭蕉の著書）に「江（象潟）の縦横一里ばかり、佛松島に通ひて又異なり。松島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。象潟や雨に西施がねぶ（合歡木）の花。」とあるに據つて書いたのである。
【腸を絞る】痛く悲しむ・いたく嘆く、意。茲は、寂しく悲しい思をうたふ、の意に見たらよからう。
【佐渡北海の荒海に云々】風俗文選所載の芭蕉の、銀河の序に「日既に海に沈んで月ほの暗く、銀河半天にかゝりて星きら／＼とさえたるに、沖の方より波の音しば／＼はこびて、魂けづるが如く、云々。荒海や佐渡に横たふ天の川。」とあるに據つたのである。
【魂を削る】前の「腸を絞る」と同手法によつたもの。寂しく悲しい思をのこす、の意に見たらよからう。

【一樹の假の宿りにも】かりそめの宿り、の意。芭蕉の句に、「まづ頼む椎の木もあり夏木立。」といふ句もあるが、茲は、芭蕉の幻住庵記の「いとかりそめに入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。」とあるに據つて書いたものと見て解するがよい。
【とく／＼の雫結びもあへず】落著く間もなく其處をすてて旅立つことを云ふ。
【とく／＼の雫】幻住庵記に「たま／＼心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく／＼の雫をわびて、一爐の備いとかろし。」とあるに據つたもの。
【とく／＼】雫の落ちるさま。
【あへず】「あへずて」の略。あへずして、の意で、下文に続く。
【旅魂】旅人の心。
【そぞろに】「すずろに」に同じ。何故ともなく心の進むさま・覺えず心の傾くさま。必ずしも自分でさうしようと思はないが自然に、の意。
【枯野の風雲を追へりし】枯野の景色をたづねて歩いた、といふことで、彼の辭世の、「旅に寝て夢は枯野をかげめぐる。」に據つたものである。
【風雲】茲は、趣・景色、などの意に用ひてある。
【實の一字】實といふ一字、即ち、眞實といふこと。

【謙して】へりくだつて。
【花鳥に情を役して云々】幻住庵記に「花鳥に情を勞して、しばらく生涯の計とさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながら。」とある。
【花鳥に情を役す】花鳥風月の吟詠にのみ耽り、たゞそれ等の物の爲に心を使つてゐる、といふこと。
【この筋】風雅の道をさしていふので、要するに俳諧である。
【行行】旅の行く先行く先のこと。
【幽玄】趣深く味の盡きないこと。
【その意識よ】この下に、「尊し」の語が略してある。補つて解くがよい。
【意識】茲では、心ほどの意に見たらよい。
【太原】本源、又は眞髓の意。
【道交】佛語で、「感應道交」の略語。衆生と佛とが眞心の交通して融合すること。茲は、達する・徹する、などの意に解したらよからう。
【本文の引用書】病問録。「一家言」の一節。
大意
本文は相當に難解である。更に、奥の細道や其の他の芭蕉

の著述を参考して、眞意を理解するやうに勉められたい。猶参考の爲に大意を掲げておく。

芭蕉は一併人である。しかしその五十年の一生を自然の仰慕讚美に送り、奥羽や北陸に旅行して旅愁を詠み、たま／＼一定の住處におちついても、直ぐ又旅に浮かれ出た。かうして最後まで、自然を友の旅人としてさまよひ歩いた彼の姿を思ひ出す者は、誰でも彼が純眞誠實の人であつたことを認めぬ譯にはゆかぬ。彼は自ら謙遜して、自分は花鳥風月の爲にのみ心を使ひ、たゞ此の風雅の道にかゝはつて暮してゐるのであると云つてゐる。しかし就中度々大自然の妙趣に觸れて感涙を流したことを思ふと、彼は全く趣味に徹底した人なのである。

一〇 詩よりして神に之く

詩を読みて當然起り來たる美意識以外、心はいつしか、一步その奥を辿りて、覺えず實在と撞著して、嗚呼神よと叫ぶことあり。神に一念の誠をささぐる利那、心はいつしか歎美の態度にすべりて、あはれあはれと風月の情そぞろなることあり。詩

よりして神に之き神よりして詩に之く。此の如きは辿りふかき人の經驗する事實なり。
(網島榮一郎)

【美意識】「實在」「撞著」「歎美の態度にすべる」「風月の情そぞろなることあり」「詩よりして神に之き云云」「經驗する事實」

○小樽高等商業學校

【要旨】深く思索する人は、詩を味つてゐる中に、何時しか神に近づき、神に祈つてゐる中に、何時しか詩境に入るものであるといふことを述べてゐる。

釋義

【詩を読みて當然起り來たる美意識以外、……此の如きは辿りふかき人の經驗する事實なり】吾々が、詩を讀んでゐる時に、當然起つて來る「あゝ美しいなあ。」といふ感じの外に、吾々の心が、何時の間にか、その美しいといふ感じよりも尙一步深い所に入込んで、思はず宇宙の本體、即ち神に接觸して、「あゝ神よ。」と叫ぶことがある。又、神に向つて誠心をこめて一心に祈つてゐる瞬間に、吾々の心が、何時の間にか、美を讚歎する詩人の態

度に變つて行つて、「あゝ美しいよ、あゝ美しいよ。」と、風流な感情が自然に湧いて來ることがある。要するに、詩を味つてゐる中に、何時の間にか神に近づき、神に祈つてゐる中に何時の間にか詩境に入込む。かういふやうな事は、深く思索する人が、實地に觸れて感じてゐる事實である。

「美意識」美を感受する意識、美しく感じることを。

「實在」常住不變で生滅變化しない實體。茲は、神の意。

「撞著」前後一致しない事、即ち、矛盾といふ意であるが、茲は、ぶつかる・出くはす、などの意。

「風月の情」自然を愛する情。風流心。

「辿りふかき人」深く思索する人。

【本文の引用書】病問錄。「一家言」の冒頭の一節。

一一 成功の意義

假令活動向上が何等の較著なる効果を産せずとも、假令落落たる雄心浩志を抱いて、空しく蓬蒿の中に埋了するが如きことありとも、誰か之を目して全く失敗せりとせむや。之を失敗せりとする

は、これ畢竟己が狹陋なる功利的打算の眼を以てのみ成功の意義を解すればなり。(網島榮一郎)

【向上】「較著」「落落」「浩志」「蓬蒿」「功利的」「打算的」

○高等學校

【要旨】成功の意義に對する世人の誤解を説いてゐる。

釋義

【假令活動向上が何等の較著なる効果を産せずとも、……功利的打算の眼を以てのみ成功の意義を解すればなり】

たとへ、其の人の心身の活動や向上心が、何等明かに目立つやうな立派な結果を造り出さなくても、又たとへ、大々的の勇ましい心や、高遠の理想を持ちながら、何の功もなく(それを實現することが出来ずに)空しく草深い田舎に埋もれて、名も聞えず、一生を終るやうな事があつても、誰が之を見て、全く失敗したといふであらうか、さうはいふまい。かういふ人の一生を失敗に終つたものと見るのは、それはつまり、功名や利益ばかりを考へ、何物をも損得勘定で見ようとするやうな狭い、いやしい見方ばかり、成功の意味を解釋するからである。

【活動向上】茲では、「心身の活動や向上心が」と、二語對立の意に

解くべきである。

向上 理想に向つて進むこと。

「較著」 明かに目立つこと。較は、いちじるしい、の意。

「落落」 志の大きく勝れてゐるさま。大きな。

「雄心」 勇ましい心。

「浩志」 大きな望。高遠な理想。浩は、大、の意。

「空しく」 何の功もなく、と解く。

「蕪蕪」 よもぎの義で、草深い處。草むら、の意。轉じて片田舎民閉。

「失敗せりとするは」 失敗したとする人は、の意。

「狹陋なる」 せまくていやしい。

「功利的」 自分の名譽や利益ばかりを主目的とするやうな。

「打算的の」 自分の損徳ばかりを主とするやうな算盤づくな。本來は、「的」の下のはない方が正しい。

「眼を以てのみ」 考方ばかりで、見方ばかりで、の意。

【本文の引用書】 病閑録。「成功の意義と安心立命」の一節。

一二 賴家公の墓

昨日は雨の日暮し無聊に困み、夕景始めて傘撃し

て山向の小山なる賴家公の墓を拜し申し候。時

政爺の刑慳何ぞ今に執著して假さざること、かく

の如きやと、見るもいたはしの荒涼たる藪蔭に空

しく一片の殘石を留めて、慘禍を生前に極め、恥辱

を末代にさらされ候事、御身一たびは征夷大將軍

の顯榮にも、のぼり給ひつる御運にして、如何なる

前世の御宿業にかおはしけむと、低回去るに忍び

かね候。(尾崎徳太郎)

【無聊】 【邪慳】 【執著す】 【いたはし】 【荒涼】 【慘禍】 【顯

榮】 【宿業】 【低回】

○名古屋高等商業學校

要旨 修善寺逗留中、賴家公の墓を拜した記事の手紙

の一節である。

釋義

【昨日は雨の日暮し無聊に困み、…低回去るに忍びかね候】

昨日は雨の降る日を暮して、退屈でたまらなかつたので、夕景に

なつてやつと傘をさして、桂川の向の小山にある源賴家公の墓に

参詣しました。北條時政老爺の殘酷な心が、どうして今日までも

執り著いてゐて許さないことがこの通りであるのであらうかと、

見るもかはいさうな荒れ果てた藪の蔭に、有り甲斐もなく一個の

墓石を残して、むごたらしい難儀を生前に受けつくし、更にこの

やうに又その恥を末代にまでもさらされてゐます事は、その御身

分が一たびは征夷大將軍の榮職にお昇りなされたほどの御運を

持ちながら、どんな前世の惡業の御果報でおありなされたのかと

考へながら、その邊を歩き廻つて、立去りかねました。

【雨の日暮し】 雨の日を暮して。「日暮し」とよむと、一日中の意

となる。

【無聊】 退屈なこと。

【邪慳】 人を殘酷に扱ふこと。

【賴家公】 源賴家。鎌倉第二代の將軍。賴朝の長子。小字は一萬

又は萬壽と稱した。正治元年守護地頭を總べ、建仁三年征夷大將軍

となつた。同三年病にかゝると、母政子、時政と議し、關西三十

八國の地頭を弟千幡に傳へ、關東二十八國の地頭及び總守護を子

一幡に譲らせた。一幡の外祖比企能員之を憤り、賴家に告げて北條

氏を亡ぼさうとして誘殺され、一幡も亦害せられた。賴家怒り、

北條氏を滅ぼさうと謀り、却つて伊豆の修禪寺に幽閉され、翌元

久元年に弒された。年二十三。(一八四二—一八六四)

【時政】 北條時政。北條第一代の執權。性は平氏。四郎と稱し

た。伊豆北條の人。初め平氏の爲に源賴朝を監した。其の女政子

賴朝と通じた。賴朝が兵を起すと、其の帷幕に參して功があつ

た。建仁三年政所の別當となり、諸政を決した。比企能員を滅ぼ

し、一幡を弒し、賴家を伊豆の修禪寺に幽して後之を弒し、實朝を

以て將軍とした。後妻收氏の勸を以て、元久二年畠山重忠を滅ぼし

た。且つ實朝を弒して平賀朝雅を將軍としようとして謀り、政子及び

義時に職を辭せさせられ、北條に徙された。建保三年に卒した。

年七十八。(一七九八—一八七五)

【執著】 心が物事にとりつく。深く思ひ込む。

【假す】 ゆるす。

【いたはし】 かはゆさうなこと。

【荒涼】 荒れはてたこと。

【尾崎徳太郎】小説家。慶應三年東京に生まる。紅葉と號し、家を十千萬堂と號した。嘗て、文科大學に學んだが半途で已めた。夙に文藝を以て家を成さうの志があり、山田美妙齋・巖谷小波諸氏と謀つて硯友社を結び、自らその牛耳を執り、我樂多文庫を發行した。明治二十二年新著百種に「色懺悔」を出してから、文名頓に揚つた。蓋し當時氏は露伴と同じく西鶴に私淑してをつた。日就社に入り讀賣新聞に筆を執つたが、歿前しばらく二六新聞に入つた。「我が文名を買ふか病骨を買ふか。」とは、氏が二六社に入る時の辭であつた。又、擅林風の俳句に長じ、又、容を好んでよく談じた。門下名をなすもの多く、泉鏡花・小栗風葉・柳川春葉・徳田秋聲等はその主なものである。明治三十六年胃癌を病んで歿した。年三十七。著述は收めて紅葉全集にある。就中伽羅枕・不言不語・多情多恨・金色夜叉等を傑作とする。多情多恨は、言文一致體の模範と稱せられる。(二五二七—二六六三)

【本文の引用書】紅葉。一冊。尾崎紅葉の遺著集。書中に紅葉の書簡抄がある。

一三 まことによくこそ我は來つれ

まことによくこそ我は來つれ。何ぞ來る事の甚だ遅かりし。山の麗しといふも、壤の堆きもののみ、川の暢けしといふも、水の逝くに過ぎざるを、牢として抜くべからざるわが半生の痼疾は、いかで壤と水との醫すべきものならむと、齒牙にもかけず侮りたりし己こそ、先づ侮らるべき愚のものなれや。
(尾崎徳太郎)

【壤の堆きもの】「暢けし」「牢として」「痼疾」「齒牙にもかけず」

○新潟醫學專門學校

【要旨】「金色夜叉」の一節。閒貫一が、はじめて病氣療養に鹽原の地に來て「このやうきよい地になぜ早く來なかつたか。」といつて、その早く來なかつたことを悔いる心持を述べてゐるものである。

釋義

【まことによくこそ我は來つれ。……先づ侮らるべき愚のもの

のなれや】私はほんたうによくやつて來た。どうして此處に來る

ことがひどく遅かつたのか(どうしてもつと早く來なかつたらうか)。山は美しいといふが、考へて見れば土が高く積もつたものに過ぎない。川は景色がのんびりしてゐるといふが、これも水が流れてゐるに過ぎないものであるのに、病根が深く、とても治すことの出来ない自分の半生涯にわたる持病は、轉地して山水の景色を眺めたぐらゐでどうして治すことが出來よう、出來はしないと考へて、今まで山水の景色などを問題にもせず馬鹿にしてゐたが、今此處に來て見ると、此の馬鹿にしてゐた自分が實は馬鹿者であつたことがわかつたのである。あゝほんたうにもつと早く來ればよかつたなあ。

【まことによくこそ我は來つれ】倒置法で「我は、まことによくこそ來つれ」である。

【何ぞ】此の結詞は、下の「し」である。

【壤】土。

【暢けし】長閑けし。茲は、川の景色ののび／＼としてゐるをいふ。

【牢として】固くして。

【痼疾】永い間の持病。

【齒牙にもかけず】氣にも留めない。問題にもしない。

一四 風水相撃ちて波を爲す

風水相撃ちて波を爲す。孤掌の鳴らし難きが如く、感興は書齋の閑居に生ずるものにあらず。我をして自ら進んで自然の中に住ましめよ。自然も亦旋りて我が中に住むべきなり。(山路彌吉)

○旅順工科大学豫行

【要旨】「旅行」のことを書いた文の冒頭の一節である。

旅行の感興は、自然の風光と我等の心情とが觸れ合つて生ずるものであるといふことが述べてある。

釋義

【風水相撃ちて波を爲す。……自然も亦旋りて我が中に住むべきなり】 風と水とがぶつかりあつて波をたてるものである。

又、片手の掌だけでは、拍手して手は鳴らされないやうに、感興は、感興を惹起すものに接觸しないで、たゞ書齋の中にじつとしてゐては起つて来るものでない。であるから書齋を出て、自分から進んで自身を自然の中に置いて、自然に接觸するやうにするがよい。さうすると、天地山川などの自然物も、また向ふから進んで来て、自分の心の中に宿つて、こゝに感興を起させるに相違ない。

「孤掌」 一方の手のひらのこと。

「感興」 心に興味を感じること。

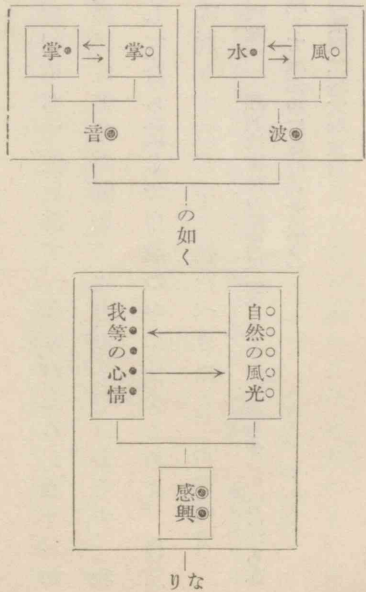
「自然も亦旋りて」 自然の方も亦先方から来て、の意。

【山路彌吉】 評論家。舊幕臣。愛山と號する。夙に史學に通じ詩文に長じた。曾て國民新聞及び國民の友に執筆した。明治三十二年信濃に入り、信濃毎日新聞主筆となり、三十七年辭して上京し、雜誌獨立評論を發刊し、又著述に従事した。著す所、荻生徂徠。新井白石・近代文學史・譯文大日本史・愛山史論・現代全史・足利尊氏 其の他數種ある。大正六年歿。年五十四。(二五二四—二五七七)

【本文の引用書】 愛山文集。一冊。評論・紀行・隨筆等十九篇を収む。

文脈

本文は「風と水とがぶつかりあつて波を起し、掌と掌とが拍ち合つて音を立てるやうに、自然の風光と我等の心情とが觸れあつて感興を生じる」といふ意味であることを、明かに解かなくてはならない。



一五 忠孝兩全の歎

洵に忠孝兩全の歎ありて、骨肉の私情さすがに絶ち易からざれど、事體の大小、云爲の先後、必ずしも

辨じ難からず。何ぞ妄りに一身の安慰を冥冥の後にのみ求むべしとせむ。(高山林次郎)

【忠孝兩全の歎】 「骨肉の私情」 「事體の大小」 「云爲の前後」

【必ずしも辨じ難からず】 「冥冥の後」

○仙臺高等工業學校

○専門學校入學資格試験

【要旨】 平重盛の早く世を去つた事の、不條理であつたことを説いてゐる。

釋義

【洵に忠孝兩全の歎ありて、……何ぞ妄りに一身の安慰を冥冥の後にのみ求むべしとせむ】 實際に忠義と孝行とは兩方完全に盡す事が出来ないといふ歎があつて、親子間の私人の情愛は、いかにも切り離し難いけれども、奉公の大道と親子の私情との事件の何れが重大であるか軽小であるか、自分の言論行爲の何れを先にすべきであるか後にしてよいかといふことは、必ずまあ辨へ知り難いことであるとは限らない(辨じられるかもしれぬ)。それにどうして無暗に自分一身の安樂を死んだ後にばかり求めなければならぬといふ譯は無からう。

【平重盛】 清盛の長子。久安年中、藏人從五位下に敘せられ、久壽年中、中務少輔となつた。保元・平治の兩役に、共に奮戦して功を減さうと謀るや、事、後白河法皇に連つた。清盛將に法皇を幽しようとし、族黨を西八條に會すると聞いて、之を諫止した。父の跋扈日に甚だしいのを憂へ、終に病をなして治承三年に薨じた。年四十二。世に小松内大臣と稱する。(一七九八—一八三九)

【骨肉の私情】 親子や兄弟の間の私人としての情愛。

【必ずしも】 きつと何々とは限らない、の意をなす。

【事體の大小】 事件の大小。

【云爲の先後】 言論と行爲との先後。

【冥冥の後】 死んだ後。

【さすがに】 古文では、しかしながら、の意であるが、茲では、

【高山林次郎】 評議家。文學博士。樗牛と號する。山形縣鶴岡の人。第二高等學校を経て帝國大學文科大學哲學科に進み、二十九

年卒業して第二高等學校教授となつた。後、辭職して博文館に入り、雜誌「太陽」に文藝批評の筆を執り、文名一世に鳴つた。三十年文部省から歐洲留學を命ぜられたが、肺患にかゝつて果さず、病痾を湘南の濱に養ひながら、筆を呵した。其の思想の變遷を見るに、初め日本主義を唱道したが、後、個人主義に傾き、遂に美的生活・本能主義を説き、ニイチエを紹介し、爲に是非の論一時に沸騰した。晩年日蓮を研究し、特に其の人格を敬慕した。三十五年に歿した。年三十四。駿河國田子浦の畔、龍華寺に葬る。墓に刻して曰く、「吾人は須く現代を超越せざるべからず。」と。蓋し氏が理想を示すものである。著書多く、樗牛全集に收めてある。その主なものは、美學・美術史・時代管見・瀧口入道・平相國・菅公傳・世界文明史・日蓮上人に關する諸篇等がある。(二五二九—二五六二)

【本文の引用書】 樗牛全集第三卷。重盛論の一節。樗牛全集は、全五冊で、著者の文藝・思索・處生等の叢書である。

一六 菅公の詩境

太宰府の配居は、菅公に取りて絶好の詩境なりき。外に名利の競争なく、内に危殆の憂悶なし。公や

靜かに往時を懷慕し現境を思料し、咏嘆に依りて其の哀情を遣るべかりしなり。天は公に授くるに詩人の天分を以てして、而して先づ公に與ふるに政治家の境遇を以てしたりき。公の政治家たりしや、煩惱内に公を苦しめ、讒奸外に公を陥れ、遂に公をして無告の流人たらしめたりき。然れども、悲しいかな、是の如くするにあらざれば、公は遂に詩人たる能はざりしなり。(高山林次郎)

【絶好の詩境】 【危殆の憂悶】 【思料す】 【咏嘆】 【天分】 【煩惱】 【讒奸】

○山口高等商業學校

要旨 菅公の詩才は天稟であつて、又その境遇がますます好詩人とならせたのであるといふことを論じてゐる。

釋義

【太宰府の配居は、……公は遂に詩人たる能はざりしなり】 太宰府の菅公の流されて居つた處は、菅公に取つては、甚だ好い、詩を作る境遇の地であつた。菅公は其處では外部には名譽や私益

を求める競争もなく、自身の心の内には、あぶない心配もない。

それゆゑに、公は靜かに以前の事を思ひ慕ひ、現在の境遇を思ひ考へ、詩歌を作ることによつて、その悲しい心情を拂ひ去る方が宜しかつたのである。天は菅公に詩人の天性を授けて、さうして其の天性を表させる前に、まづ公に政治家の境遇を與へたのであつた。公の政治家であつた時には、心のなやみや内部から公を苦しめ、讒言する悪人が外部から公を罪に陥れ、たうとう公を、告げ訴へる者のない流人とならせたのであつた。けれども、悲しい事には此のやうにしなければ、公は結局詩人となる事が出来なかつたのである。

【太宰府】 今の福岡縣筑紫郡太宰府町に「都府樓地」としてその古址を存してゐる。

【菅公】 是善の子。字は三、小字阿呼。字多、醍醐の朝に仕へ、儒家から拔擢されて、昌泰二年右大臣となつた。學問該博、治體に熟達し、深く上下の信任を受けた。世に菅丞相と稱する。左大臣藤原時平が其の寵遇の己が右に出るのを嫉み、黨を結んで帝に讒するに廢立の事を以てした。延喜元年遂に太宰權帥に貶せられた。筑紫に至り門を閉ぢ、文墨自ら遣る。三年配所に薨じた。年五十九。正一位太政大臣を賜り、靈を祀つて天滿天神と稱する。(一五〇五—一五六三)

【配居】 鳥流しにされてゐる處。

【絶好】 甚だよい。

【詩境】 詩を作る境遇。茲は、詩を作る身分の地と解する。

【危殆】 あやふい・あぶない。殆も、危。

【憂悶】 うれへもだえること。わづらひもだえること。うれへてやるせなく思ふこと。心配。

【公や】 「公は」を、やゝ感歎的に言つたものである。

【思料】 思ひ考へること。

料 「はかる」と訓む。

【咏嘆】 詩や歌を作ること。

【哀情を遣る】 かなしい心情を拂ひ去る。かなしい思をなぐさめる。

【べかりしなり】 宜しかつたのである。

【天分を以てして】 詩人の天性を授けて、の意。

天分、天から受けた性質、又は運命。茲は、前者。

【境遇】 身のおきどころ・處生上の位置・現在の身分。

【政治家なりしや】 政治家であつた時には、

【煩惱】 佛語。情欲願望等から起る心のなやみ。

【讒奸】 讒言する悪人。主として、藤原時平をさす。

【無告】 何人にも告げ訴へて救を求めることの出来ない者。又、

たよる人のない貧窮の人。茲は、前者。
【本文の引用書】 樗牛全集第三卷。「管公傳」の一節。

一七 孔子既に志を魯に得ず

孔子既に志を魯に得ず。乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に回さむとす。その志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず。世また耳を名教に傾くる者なし。ここに於て已むを得ず、老脚蹠として再び魯に歸り、歎じて曰く、嗚呼吾が道遂に窮す。世遂にわれを知るものなきか。」と。(高山林次郎)

○東北帝國大學專門部
○専門學校入學資格試験
要旨 「世界の四聖」について書いた文の一節で、聖人

孔子が大道を天下に唱へたが、その説が用ひられないで歎いたといふことを記してゐる。

釋義

【孔子既に志を魯に得ず。……】「嗚呼吾が道遂に窮す。世遂にわれを知るものなきか。」と 孔子は最早魯の國では、自分の道を行はうとする志を達することが出来ないで、そこに、大いに憤慨して郷里を立去り、重大な人の道や、人の守るべき本分を天下に言ひ出して、衰へ廢つた道德を再びもとにひき戻さうとした。その志は實に高大であるといつてよろしい。かうして諸國を説き廻つて歩くこと十三年の久しきに及んだが、時勢が悪いために、其の道が用ひられず、世間にはまた聖人の教を聽かうとする者もない。そこで仕方なく、老いぼれてよろ／＼した脚を引きずつて、再び魯の國に歸り、歎息して、「あゝ私の唱へる大義名分の教は、たうとう行きつまつてしまつた。此の世にはいよ／＼私の心持を理解してくれる者はないのか。」といった。

【孔子】 周の聖人。儒教の宗祖。字は仲尼、孔子と稱する。其の先は宋人。父は叔梁紇、母は顔氏。魯の昌平郷に生まれた。半生を諸國遊歴の中に送る。書を序し、詩を刪り、樂を正し、易の象象・繫辭・說卦・文言を序した。弟子三千、身六藝に通ずる者七十

二人。魯の哀公の十四年に春秋を作つた。敬王の四十一年に歿した。年七十三。(一一〇—一八二)

【魯】 孔子の生れた國。

【慨然】 世に對して憤慨する有様。

【故國】 自分の生れた國。茲は、魯國をさす。

【大義】 重大な人の道、の意。狭義には、君臣間の大道で、臣として君國につくすべき道をいふ。

【名分】 名義によつてあらはされた人倫上の分際で、君に對しては臣たるの分際があり、父に對しては子たるの分際があるの類をいふ。茲では、廣義に、人の守るべき本分、の意に見てよい。

【狂瀾を既倒に回さむとす】 荒浪の倒れかゝつて來たものを、元のところに引き戻すやうに、一旦衰頹した大義名分を復活せよとす。意。韓愈の「廻狂瀾於既倒」に據つたもの。

【狂瀾】 荒れ狂ふ大なみ。

【既倒に回す】 一旦衰頹したものを復活させることに、喻へていふ。

【志や】 志は。

【漂浪】 さまよひあるく。何處といふ當もなく歩まはること。

【十三年】 十三年なりしが、の意。

【時非にして】 時が悪くて。孔子の説く道が行はれるやうな、よ

い時勢ではなかつたことをいふ。

【道容れられず】 孔子の唱へる道が、世に用ひられなかつたことをいふ。

【名教】 孔子の教。儒教。聖人は、五倫・五常などと名目を立てて教へるからかくいふのである。大義名分の教、と解いてよい。

【老脚蹠として】 老いた脚をひきずつて、つまづきながら歩いた。老の身でよろ／＼と歩きながら。

【蹠】 足のつまづく義。足のよろ／＼として進まない、意。又志を得ぬ意にも轉用する語。

【わが道窮す】 自分の唱へる道はもうゆきつまつた。即ち、何處へ往つても排斥される、意。

【われを知る】 自分の眞價を認めてくれる者。自分を理解してくれる者。

【本文の引用書】 樗牛全集第三卷。「世界の四聖」の一節。

一八 天上の明月

國破れて山河ありといふとも、而も天上の明月の長へに渝らざるに較べなば、山河もなほ桑滄の變

あるを免れじ。されば、人生古今の盛衰を瞰下して而も自らは一分の隆替をも感ぜざる月が、過去世の追憶に際して、最も有力なる媒介者たるは、極めて自然のことなるべく、月によつて遠人を懷慕する情も、同一の起源を有すべし。(高山林次郎)

○北海道帝國大學豫科
「國破れて山河あり」 「桑滄の變」 「隆替」 「媒介者」 「遠人」

要旨 月を眺めて過去の事を想ひ起し、又遠人を思ひ起すといふことを説いてゐる。

釋義

【國破れて山河ありといふとも、……月によつて遠人を懷慕する情も、同一の起源を有すべし】 國が亡びても山や河はそのまゝ残るといふが、それも、天上の明かな月の永久に變らないのに較べて考へて見ると、其の山河にもやはり桑畑が青海となるやうな變化のあるを免れられまい。そのやうに世の中も常に變つてゐるのである。さういふわけであるから、人の世が古から今日へと、盛になつたり衰へたりして變つて來た有様を天上から見

おろして、而も、自分は少しも盛衰の事をも感じない月が、吾々が、過去の世の中を憶ひ起す時に當つて、一番力強い仲立の者となることは、至極自然のことであらうし、又場所を選ばず等しく照らす月を仲立として遠方に居る人を慕はしく思ふのも、自然のことであつて、此の二つは何れも、心の聯想作用に因るといふ同じ原因を持つてゐるであらう。

「國破れて山河あり」 國家は亡びても、山河はそのまゝに残る、の意。唐の詩人、杜甫の春望の詩句に「國破山河在、城春草木深。」をあるに據つたのである。

「桑滄の變」 くはばだけが何時しか變つてあを海となる、の意。土地の變化や時勢の變遷の甚だしいことにいふ。劉延芝の詩句に「更開桑田變、成碧海。」

「免れじ」 このじは、まい、の意。推量して打消す意の助動詞。「一分」 少し、の意。一分一厘といふやうに、寸法の少いといふ義からとつた語。

「隆替」 「盛衰」と同意。替は、すたる。

「過去世」 この上に「人の」の語を補つて見るがよい。

「媒介者」 仲立となる者。介も、仲立、の意。

「遠人」 遠く隔つた土地にゐる人。

「同一の起源」 心の聯想作用をさしていふ。過去世の追憶の媒介

となる場合は、縦に時間の相違があり、遠人懷慕の媒介となる場合は、横に空間(場所)の相違がある

【本文の引用書】 樗牛全集第一卷、「月夜の美感」の一節。

備考

いつともかはらぬ秋の月見れば、たゞ古の空ぞ戀しき。

(藤原實綱)

住みなるゝ都の月のさやけきに、なにか鞍馬の山は戀しき。

(齋院中務)

一九 其の人によりて其の文を品す

蓋し文を論ずるに、ひたすら文による、必ずしも當れりとせず。其の人によりて其の文を品するに及びて、情偽是非更に一段の分明を加ふるものなり。これ節行の、亦文士に重んずべき所以なるか。

(高山林次郎)

【品す】 【情偽】 【是非】 【一段の分明】 【節行】

要旨 文章を評論するには、其の人の文章と人格との両方面からすべきであるといふことを説いてゐる。

釋義

【蓋し文を論ずるに、……これ節行の、亦文士に重んずべき所以なるか】 思ふに、文章を評論するのに、その文章ばかりによるのは、きつと正當なやり方とは限らない。其の作者の人格に基いて、文章を批評すると、その文が作者の真情によつて書かれてゐるかどうか、或は正しいものかどうか、文章だけについて批評する場合よりも、一層はつきりとわかるものである。これが、文士もやはり行を慎まなければならないといふ事の理由であらう。「人によりて」 文を書いた人の人格に基いて。

「品する」 一品評する。批評する。

「情偽」 眞情虚偽。まことといつはり。

「是非」 正しいか間違つてゐるか。

「一段」 人物を考へず、たゞ文章だけによつて、文章を批評するよりも一層、といふ意。

「節行」 節義ある行。正しい行。

「亦」 宗教家・教育家などは勿論ではあるが、文章家もやはり、の意。

「所以なるか」「所以なり」と、斷定的にいふべき所を、謙遜的に
軽い疑問の形で結んだのである。

【本文の引用書】 樗牛全集。(刪修)

二〇 進歩の標準

書は能く人を教へ、自然は能く人を造る。社會は能く人を制し、自然は能く人を解放す。人をして能く其の本に歸らしむるものは自然なり。社會も亦時に自然に歸するを要する時あり。自然は何れの時代に於ても進歩の標準なればなり。

(高山林次郎)

〔自然〕〔社會〕〔制す〕〔解放す〕〔其の本〕〔進歩の標準〕

○高等學校

要旨 自然は吾々に感化を及ぼして人格を造つてくれると同時に、社會進歩の標準をも示してくれるといふことを論じてゐる。

釋義

【書は能く人を教へ、自然はよく人を造る。……自然は何れの時代に於ても進歩の標準なればなり】 書物は吾々人間を教へて、智識・道德等を修得させてくれるし、天地山川等の自然物は吾々人間に感化を及ぼして、人格を造つてくれる。それから又、社會はその道德とか習慣とかいふものによつて、吾々人間の自由を束縛するが、自然は何等の束縛をしないで、人間を自由ならしめるものである。それ故に人をして其の本來の性情に立歸らせるものは、自然であるといつてよい。それから社會そのものも亦、それが不自然で無理な發達をなした場合には、自然のままの状態に立歸つて自己改造をする必要があるのである。何となれば、自然界といふものは、少しも無理がなく、何れの時代に於ても人間進歩の目當となつてゐて、それにそむいては、完全な進歩をなすことが出来ないからです。

〔自然〕 人爲に對する語。天地・山川・森林・湖海等の自然物。

〔社會〕 人類が共同生活をする爲に造つた團體。

〔人を制す〕 人の自由を束縛する。茲は、社會には、風俗・習慣・道德等があつて、吾人をしてそれに従はせる。又、共同生活をする爲に、各個人の要求を制限する。

制す 制限し束縛する。

〔解放す〕 制限や束縛を解いて自由にする。吾々が自然に接する時は、何等の束縛を感じさせられず、自由に行動し得ることを指す。

〔本に歸す〕 本來の姿(自然の状態)に立歸る。

本 人爲の加はらない本の状態。人間は元來自然兒である。

〔進歩の標準〕 進歩の目あて。進歩の大本。

【本文の引用書】 樗牛全集第五卷。「夏季の學生」の一節。

二一 永生の道

人は如何にせば死して生くるを得むか。世に神に禱りて、永生を求むるものあり。佛に願ふものは、人生の倏忽を歎きて、涅槃の寂寞を求む。されど形體を離れて、魂魄なきを如何にすべき。その墳墓を壯大にし、金を鏤め石に刻して、名の後世に傳らむことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり、風雨幾歳時移り人渝り、桑滄

幾度か變轉して、墓標獨り全きを得べけむや。かくの如きは永生の道にあらざるなり。(第一節)ま

ことの永生は名によりて生くるにあらずして、事によりて生くるなり。儒教の存する所、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建てる所、至る處に釋迦あり。耶穌は十字架に懸りきといへども、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激するもの胸には楠公其人の生命あり。蒸氣機關の動く所には、ワットの血液あり。電氣の線の懸る所は、即ちフランクリンが永生の地にあらずや。(第二節)(高山林次郎)

〔死して生く〕 〔永生〕 〔倏忽〕 〔涅槃の寂寞〕 〔事によりて生く〕

○大阪商科醫學專門學校

○和歌山高等商業學校

要旨 「死と永生」を論じた文の一節で、二節から成つてゐる。第一節は、人の、或は靈魂の永生を望んだり、或は徒らに極樂往生を望んだり、或は墳墓を壯大にしたり

する事の不得策であるといふことを説き、第二節は、人の生命の眞に永遠に生存する意義を論じてゐる。

釋義

【人は如何にせば、死して生くるを得んか。……かくの如きは永生の道にあらざるなり】 人間はどうしたならば、肉體が死んでも、生命は生存することが出来るか。世の中には、耶穌教信者のやうに神に歸つて靈魂の永遠の生命を望む者があり。又佛教信者のやうに、佛に願ふものは、人間一生の忽ち過ぎ去るはかなさを歎いて、極樂淨土に死んで往く物靜かな境遇を望んでゐる。けれども、人間は肉體を離れては靈魂がないのであるから、徒らに肉體を棄てても仕方がない。それはつまり、まらぬことである。又死後の爲にと思つて、その墓場を立派に大きく造つて、金に文字を彫りつけ、石に文字を刻みつけて、その名の後世に傳はることを望む人もある。けれども、時はすべての物を破りこはす者であつて、時が経ると物が破りこはされるのである。風吹き雨降ることが幾年かを経て、時代が移り人間が變り、桑畑が青海に變るやうに、地形地相が幾度か移り變つて、墓じるしの物ばかりが、たゞ無事に残つてゐることが出来るか、それは出来ない。それで

あるから、そのやうにする事は、生命の永遠に生存たる方法ではないのである。(第二節)
【死して生く】 肉體が死んでも、生命は生存すること。
【永生】 生命の永遠に生存すること。耶穌教では靈魂の永遠に生存することをいふ。

【倏忽】 疾き貌。たちまちであること。

【涅槃の寂寞を求む】 佛教の、極樂往生を望む意。

涅槃、梵語。安樂・寂滅・不生不滅と譯する。茲は、寂滅、即ち、死の意。

寂寞、物寂しいこと。物靜かなこと。茲は、後者。

【形體を離れて魂魄なきを如何にせむ】 徒らに肉體を棄ててしまつてもつまらない意。

形體、人間の肉體。魂魄、靈魂、即ち、たましひ。

【その墳墓を】 この上に、「死後の爲にと思つて」を補ふがよい。

【桑滄】 世の變遷の甚だしい意に用ひるが、茲は、地形地相の變ることをいふ。

【墓樞獨り】 墓じるしばかりが、と解く。

【六】この永生は、名によりて生くるにあらずして、……即ちフランクリンが永生の地にあらずや】 人の眞の永遠の生存は、名によつて生存するものではなくして、事業によつて生

存するものである。故に儒教の遺つてゐる所には、今でもやはり孔子の生命の生存しないことはなく、寺院の建つてゐる所には、何處にも釋迦の生命が生存してゐるやうに思ふ。耶穌は十字形の柱に懸つて死んだけれども、その生命は、今でもやはり基督教信者の生命となつて、生存してゐるやうに思ふ。楠正成公の歴史の事柄に感じて勵む人の心の中には、楠公その人の生命が宿つてゐるやうに思ふ。蒸氣機關の動いてゐる所には、發明者ワットの生命の血液が流れてゐるやうに思ふ。電氣の線の懸つて居る所は、つまり發明者フランクリンの永遠の生命の生存してゐる場所ではないか、生存の場所であるやうに思ふのである。(第三節)

【事によつて生く】 事業によつて、生命の生存すること。

【孔子】 下篇、一七に、既出。

【釋迦】 釋迦牟尼の略。佛教の始祖。前五世紀の頃、中印度迦毘羅衛城主淨飯王の子悉達多太子の出家修行して佛となつたもの。佛教は其の所説に基く。

【耶穌】 イエス・クリスト。耶穌教の始祖。猶太に生まる。預言者ヨハネの説教を聴いて大いに感じ、猶太人の久しく期望してをつた救世主であるといふ確信を得、三十歳の頃、福音を宣傳し宗教の革新を唱道すること三年、不幸敵にゴルタ山上に磔殺された。(西紀前四—西紀後二九)

【十字架】 十字形の柱。罪人を磔にする刑具。

【懸りきといへども】 懸つて死んだけれども、の意。

【楠公】 楠正成。正行を「小楠公」といふ。

【感激する】 感じて心に勵む。

【ワット】 ジェームス・ワット。英國人。蒸氣機關の發明者。(西紀一七三六—一八一九)

【フランクリン】 ベンジャミン・フランクリン。米國人。電氣力應用の元祖。(西紀一七〇六—一七九〇)

【本文の引用書】 樗牛全集第四卷。

三 神相接せしむ

人に百歳の齡なく、世に別離の愁を知らざる人はあらじ。生死は世の常なり。別離は却て懷慕のたのしみを深からしめ、懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ。(姉崎正治)

【世の常】 懷慕のたのしみ 【時と處との隔を越えて神相接せしむ】

要旨

人を懷慕すること、何時でも、又何處でも自由

に、その人と相接することが出来るといふことを説いてゐる。

釋義

【人に百歳の齡なく、……懷慕は時と處との隔を越えて神相接せしむ】 人間の生命には限があるから、百年も長生するといふことはなく、又世間には人と別れる悲しみを知らない人はないであらう。然しながら、生れたものが死ぬといふことは、世間普通のことである。又別れるといふことは、却つてその別れた人の上を思ひなつかしむといふ樂しみを深くさせ、人をなつかしみ思ふといふことには、時間的にも空間的にも隔てをなすものがないから、何時でも又何處でも、精神的に、自由にその人と相接し相語らせるものである。

【世の常】 世間普通のこと。

【懷慕のたのしみ】 別れた人（茲では、死んだ人）を思ふ時、そこになつかしきがあり、單に悲しいといふだけではなく、何となく一種の樂しきを感じるをいふ。

【時と處との隔を越えて】 時間と空間とを超越して。普通ならば、時が違ひ場所が違つてゐると、自由に逢ふことも語れることも

出来ないが、記憶の上では、自由に逢ふことも語れることも出来るといふことを指していふ。

【神相接せしむ】 精神的には、相接し、相交ることが出来る、といふ意。
神、精神。

【姉崎正治】 文學博士。嘲風と號する。明治六年京都に生れた。明治二十九年東京帝國大學哲學科を出て、その講師となつた。高山樗牛と親友であつた。文部省留學生として歐洲に遊び、専ら宗敎哲學を修めた。歸朝後、東京帝國大學文學部教授となつて、文學博士の學位を受けた。比較宗敎學・印度宗敎史考・復活の曙光・國運と信仰等の著がある。（二五三三）

【本文の引用書】 停雲集。一冊。著書の感想・紀行等を載せたもの。本文は、其の「序言」の一節。

二三 鎌倉の覇府

平家の一門廟堂に列し、六波羅の榮華四時を春にせる時、東國草萊の間に潜める源氏の一族、忽ち崛起して之を追ひ落し、鎌倉の覇府新に政治の中心

となれり。其の變轉の激甚なる其の曲折の多様なる、我が國史の繪卷中、色彩際立ちて絢爛たるを見る。（大町芳衛）

【廟堂】 【六波羅】 【草萊の閒】 【崛起】 【覇府】 【曲折】 【繪卷】 【絢爛】

○高等學校

【要旨】 榮華を極めてゐた平家が滅亡して源氏の世となつたが、その間の急激な變化は、日本歴史中特に目立所のものであるといふことを述べてゐる。

釋義

【平家の一門廟堂に列し、……我が國史の繪卷中、色彩際立ちて絢爛たるを見る】 平家の一族がそつて朝廷の要職について天下の政治を執り、六波羅の平家の邸宅に於ては、皆花やかな生活をつゞけて恰も一年中を春にしたやうな風であつた時、關東地方の草深い田舎に隠れてゐた源氏の一族が、俄かに起り立つて、平家を都から追ひ出して逃げゆかせ、源氏によつて作られた鎌倉の幕府が新に政治の中心となつた。その移り變りのはげしい事や、その事件が込入つて様々であることは、我が國の歴史を一

卷の繪卷物と見るならば、その中でも特に目立つて、花やかな美しい場面であるのを感じる。

【一門】 一族。もと一家の者の義から出た語。

【廟堂】 政治をする所。朝廷。

【六波羅】 京都の地名で、平家の邸宅の並んでゐた所である。

【四時を春にせる時】 一年中春のやうに樂しく暮した時のこと、の意。

【草萊】 雜草の生茂つた所。田舎。茲は、京都に對して關東のことをいふ。

【崛起】 山の聳え立つこと。俄かに起り立つこと。

【覇府】 諸侯の首長の居る所。幕府をさす。

【激甚なる】 この下に「事や」を補つて解く。

【曲折】 變化。

【多様なる】 この下に「事は」を補つて解く。

【繪卷】 「繪卷物」の略。いろ／＼の場面を續き繪にして卷物としたもの。茲は、連續せる史實を、一卷の繪卷物に喩へたのである。

【絢爛】 きら／＼とまばゆいほど美しいこと。きらびやかなこと。花やかなこと。

【大町芳衛】 明治大正にかけての文章家。明治二年一月二日、高

知市に生れた。舊高知藩士大町通の三男。桂濱月漁郎、又は桂月と號した。明治二十九年帝國大學文科を卒業した。嘗て島根縣菟川中學に教鞭を執つたが、博文館の聘に應じてその編輯局に入り、「太陽」・「中學世界」等に筆をとつた。又四十三年、富山房の雜誌「學生」の主筆となつた。その文章は、平明達意を旨とし、胸中の磊塊を盡さねばやまぬといふ風があり、而かも雄健で、一種の情味を保つを特色とした。赤門出身の文士中、其の名最も世にあらはれ、特に青年學生間に持て囃された人である。晩年酒毒を患ひ、大正十四年六月十日、陸奥の蕪温泉で歿した。年五十七。辭世に、「ごらくに、こゆるたうげの、ひとやすみ、つたのいでゆに、みまばきよめん。」と。著書に黃菊白菊・大絃小絃・一蓑一笠・學生訓・日本文明史・筆のしづく・新體文範・青年時代・東京遊行記・關東の山水・行雲流水・箒舛・新譯日本外史・社會訓・古今史談・伯爵後藤家次郎・日本男兒論・桂月書翰・桂月學生文範等頗る多い。今これ等は桂月全集十卷となつて刊行されてゐる。(二五二九―二五八五)

【本文の引用書】 源平物語。一冊。源平時代の歴史の記録書。本文は、その「序」の一節である。

二四 太平愈續きて文化愈進む

干戈天下に旁午して、兵馬倥傯、肝腦地塗に地に塗れ、腥風到る處に吹きすさぶ間は、文化の芽の萌さむよしもなければ、一たび馬は華山の陽に歸り、牛は桃林の野に放たれ、堯舜風、太平の氣象融融として起るに及びて、文化の芽茲に始めて萌す。太平愈續きて文化愈進む。文化愈進みて、生活の程度愈高し。所謂治に在りて亂を忘るるの危機實にこの際に胚胎す。(大町芳衛)

- 〔干戈天下に旁午す〕 〔兵馬倥傯〕 〔肝腦地に塗る〕 〔腥風〕
 - 〔文化の芽の萌さむよしもなし〕 〔馬は華山の陽に歸り云云〕
 - 〔堯舜風〕 〔太平の氣象〕 〔融融〕 〔危機〕 〔胚胎す〕
- 高松高等商業學校

要旨 「國家の盛衰」と題する文の一節で、戦争の後に太平があらはれ、太平になると文化が起り、文化が愈進歩すると、「治に居て亂を忘れる(文弱に流れる)」といふ危険が生ずるやうになるといふことを論じてゐる。

釋義

【干戈天下に旁午して……所謂治に在りて亂を忘るるの危機、實にこの際に胚胎す】 戦争が天下到る處に行はれ、軍隊が諸所を忙しく馳せ廻り、慘殺された者の骸は地に捨てられていつまでも取り收める者もなく、血腥い風はそこらぢうに吹き荒れて居るといふやうな間は、文化の芽の出る来ようもないが、一旦戦争がすんで、戦争に使役された牛馬も解放され、風雨も順當となり、如何にも太平らしい氣分がのんびりと現はれて来るやうになつて、茲に始めて文化が起つて来るのである。ところで太平がいよいよ續くと、文化もいよいよ進み、文化がいよいよ進むと、國民の生活程度は、ますます高くなつて行く。世間でいふ、治に在つて亂を忘れる、即ち、太平に馴れて戦争などのことを忘れてしまひ、文弱に流れるといふ危険な場合は、實にかういふ際にそのものが始まつてゐるのである。

【干戈天下に旁午す】 天下到る處に戦争が行はれる。
干戈、たてとほこ。轉じて、戦争、の意。
旁午、物が互に入りまじること。「干戈が縦横に交る」といふことから、到る處に戦争がある、の意となる。
【兵馬倥傯】 戦争でいそがしいこと。

倥傯、多忙なさま。

【肝腦地に塗る】 人間の臟腑や腦髓が地上にさらされ、泥土にまぶれるといふことで、慘殺が行はれるをいふ。

【長へ】 とこしへ、いつまでも。ながく。

【腥風】 血なまぐさい風。戰場を吹きわたる風。

【吹きすさぶ】 烈しい勢で吹く。

【文化の芽萌さむよしもなし】 世の中の開け初めようがない。萌す、芽を出す。

【馬は華山の陽に歸り云々】 戦争が止んで、牛馬が不用になつた(平和となつた)こと。周の武王が、殷に勝つて、天下を平げた後、戦争に使つた馬を華山の陽に歸へし、牛を桃林といふ原野に放つて、再び戦争をしない事を天下に示した故事から来た句。書經に「歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服。」とある。

【華山】 支那五嶽の西嶽。陝西省華陰縣にある。

【陽】 「山南・水北」を陽といふ。

【桃林】 華山の東にある地名。

【堯舜風雨】 風雨が順當となる意で、實は、世が平和に治まることとの形容。五穀の實るに都合のよい風雨を、支那古代の聖帝である堯舜の徳にたとへて言つたのである。

【氣象】 趣、様子・氣分。

「融融」のどかなさま。のび／＼と。

「治に在りて亂を忘れる」天下がよく治つてゐると、つひそれに馴れて、戦争の事などを忘れてしまつて、文弱に流れるをいふ。易、駁辭に「君子安而不^{ハツテ}忘^レ危、存而不^レ忘^レ亡、治而不^レ忘^レ亂。是^ヲ以^テ身安而國家可^レ保也。」とあるに據る。

「危機」あぶない場合。

「胚胎す」きざす。

【本文の引用書】 黄菊白菊。一册。今收めて、桂月全集第一卷にある。本文は、「國家の盛衰」の一節。

二五 深山の奥の一本の櫻

櫻は多きをよしとす。されど人跡絶えたる山奥、清水ちよろちよろ流るるあたり、よしや事を解せざる詩人は、紅葉と共に夜の錦になすらふとも、その梢とも見えざりし一本の櫻の花にあらはるるも、亦興あらずや。(大町芳衛)

「よしや」 「事を解せざる詩人」 「紅葉と共に夜の錦になすらふとも」 「その梢とも見えざりし一本の櫻」 「花にあらはるる」

○臨時教員養成所

【要旨】 櫻は澤山の木が集まつて咲いてゐるのがよいが、然し、山奥に他の木に交つて、たゞ一本咲いてゐるのもよいものであるといふことを述べてゐる。

釋義

【櫻は多きをよしとす。……花にあらはるるも、亦興あらずや】 櫻は何本も集つて咲いてゐるのがよい。然し、人の全く來ない山奥の清水がちよろ／＼と流れてゐる邊にある櫻をば、たとへ

風流を解しない詩人が、紅葉と一緒に夜の錦に譬へて、「折角美しい色をしてゐても、誰も見るものがない。」といはうとも、一本の櫻が、他の木と交つてゐて、それが櫻の梢であるとも見えなかつたのが、花が咲いて始めて櫻であるといふことがわかるのも、亦興味があるではないか。

「よしや」 たとへ。

「事を解せざる」 風流を解しない。

「紅葉と共に夜の錦に」 古今集、卷第五、秋歌下、紀貫之の歌に「見る人もなくて散りぬる奥山の、紅葉は夜の錦なりけり。」とあるに據つたのである。

「なすらふとも」 上の「よしや」に應ずる語で、假定法である。猶「紅葉と一緒に夜の錦にたとへて、折角美しい色をしてゐても、誰も見る者がいないといはうとも」と、語を補つて解くがよい。

「その梢とも見えざりし云々」 詞花集、卷第一、春、源頼政の歌に「深山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり。」とあるに據つたのである。

【本文の引用書】 桂月全集第一卷、「九十の春光」の一節。

二六 平家物語はさながらの戯曲

祇園精舎の鐘の聲、沙羅雙樹の花の色、卷を開いてまづ響く琅琅の調は、流麗にしてまた凄慘なり。二十年の榮華の夢、昨日は樓臺の花の宴に盃を廻らし、今日は海上に楫を枕に月に泣く。有爲轉變の世の習とはいひながら、榮枯盛衰掌を覆すこと

平家の一門の如きは、古今東西に例少く、ありの儘の事實は、詩人の空想を待たずして、さながらの戯曲なり。その局面の波瀾に富めるは、即ち平家物語の七百年後の今日も、なほ世人に愛讀せらるる所以にして、一篇の樞軸たる大人物は、いふまでもなく太政入道淨海なり。(藤岡作太郎)

【祇園精舎の鐘の聲】 「沙羅雙樹の花の色」 「琅琅の響」 「流麗」

【凄慘】 「有爲轉變」 【戯曲】 【樞軸】 【入道】

○廣島高等師範學校

【要旨】 平家物語の趣味を述べて、七百年後の今日も世人に愛讀せられる理由を論じてゐる。

釋義

【祇園精舎の鐘の聲、……一篇の樞軸たる大人物は、いふまでもなく太政入道淨海なり】 「祇園精舎の鐘の聲、沙羅雙樹の花の色」と、書を開いて先づ響く琅々たる文の調子は、すらすらとして麗しくあつて、又いたましい趣がある。彼の平家の運命は、二十年の繁榮の夢を見たやうな有様で、以前は高樓の花見の

宴で互に杯を廻らして楽しんでをたが、今は海上で楫を枕にして輝く月の下に泣き悲んで居る。如何に事柄の移り變る世の中とはいひながら、榮枯盛衰の手の平を返すやうに忽ち變ることが、平家の一族のやうなものは、古今東西にその例が少く、そのありのままの事實は、詩人の空想によらないでも、そのまゝの芝居である。その場面の變化に富んで居ることは、即ち平家物語が七百年後の今日も、やはり、世人に愛し讀まれる譯であつて、その一部の物語の中心となつてゐる大人物は、言ふまでもなく、太政入道淨海その人である。

「祇園精舎の鐘の聲沙羅雙樹の花の色」 平家物語開卷第一に「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。」とある句を指していふ。

祇園精舎 古昔中印度の釋迦如來のつた寺の名。精舎は、寺の義。本書上篇、平家物語鈔、一の釋義を参照されたい。

沙羅雙樹 高く聳えて雙び生えた樹の義。沙羅は、梵語で、高遠の義。釋迦如來がその樹の下で寂滅された時、樹が枯れたと言ひ傳へてゐる。本書上篇、平家物語鈔、一の釋義を参照されたい。

「巻を開いて」 この下に「讀みて」を補つて解くがよい。

「琅琅の調」 金玉の撃ち合ふやうな清らかな聲の調子。

「流麗」 文章・辯説・書體などの、のび／＼してうるはしいこと。

入道 佛語。一般には、佛道に入ることであるが、古昔は、佛道に入つた三位以上の人の稱。

【藤岡作太郎】 國文學者。文學博士。東圃と號した。明治三年加賀の金澤に生れた。京都の第三高等學校から帝國大學文科大學國文科に入り、二十七年卒業し、第三高等學校教授に任ぜられた。後東京帝國大學文科大學助教授に轉じ、國文學史を講じた。三十九年文學博士の學位を授けられた。四十年文部省公設繪畫展覽會審査員を命ぜられた。四十三年十一月に歿した。年四十一。大町桂月嘗て評して曰く「藤岡東圃、國文家の中には、とびはなれて議論文をよくす。一代の選なり。」と。著す所、國文學全史・近世繪畫史・日本風俗史・國文學史講話・東圃遺稿等がある。(二五三〇—二五七〇) 【本文の引用書】 東圃遺稿。二冊。著者の雜纂遺稿集。本文は「平家物語」の一節。

二七 悲劇的人物

余輩が歴史上の事實を一の戯曲として最も興味を感じるは、壯大なる偉人と時代の思潮と交渉する際に、衝突を生じ、破綻を起すところにあり。社

「凄慘」 いたましいこと。

「有爲轉變」 佛語。世の中の事物の移り變る、意。

「さながらの戯曲なり」 そのまゝの演劇の脚本である。

戯曲 舞臺で演ずる詩文、即ち、演劇の脚本類をいふ。技は、芝居と見てよい。

「局面の波瀾」 場面の變化。

「樞軸」 中心、の意。戸のくるゝと、車の心木との義から轉用した語。

「太政入道淨海」 平清盛のこと。忠盛の長子。世に白河法皇の落胤といふは、疑はしい。久安二年正四位安藝守となつて任に赴いた。熊野社に參詣しようとして、海路安濃津に至つたところ鱸魚躍つて 船中に入つたのを、歡喜して家を興すの瑞とした。保元平治の亂に殊功があつた。諸道の源氏を勦滅して威を海内に振つた。仁安二年從二位太政大臣を拜し、隨身兵仗輦車入闕を聽された。剃髮して淨海(一に靜海)といふ。館を西八條に、別莊を攝津福原に起し、驕恣專横上下望望した。治承三年後白河法皇を鳥羽に幽し、四年都を福原に遷し尋いで復した。源賴朝兵を伊豆に擧げるに及んで悔恨激怒し、法皇に追討院宣を強請し、養和元年宗盛を將として將に發せしめようとしたその前一日、偶々大熱を病んで薨じた。年六十四。(一七七八—一八四一)

會より離れて孤立せる人は敢て與らず。紛紛擾

擾たる群衆の蛙鳴蟬噪も敢て與らず。この點よ

り見て悲劇的運命を具有したる歴史的人物は、清盛を措いて他に誰かある。(藤岡作太郎)

【時代の思潮】 【交渉】 【破綻】 【與らず】 【紛紛擾擾】 【蛙鳴蟬噪】

蟬噪

○廣島高等師範學校

要旨 平清盛は悲哀な運命を持つてゐて、興味に富んでゐる人物であるといふ事を記してゐる。

釋義

【余輩が、歴史上の事實を一の戯曲として……清盛を措いて他に誰かある】 吾々が歴史上の出來事を、一つの芝居と見做して、一番面白味を感じるのは、非常にすぐれた大人物と其の時代の一般の思想との間に關係を生じた場合に、兩方がうまく調和しない、衝突を起し、その爲に、其の大人物の生活や計畫などがすつかり破壞されて悲慘な運命に陥るといふ點である。けれども、世間から離れて、孤立的の態度をとつてゐる人物(隱者など)は、たとへそれが如何に大人物であらうとも、芝居としては面白

味のある中には這入らない。またごた／＼と入り亂れてゐるくだらない多數の人間ども(偉人でない者)の、蛙や蟬の鳴きさわぐやうに、やかましく騒ぎ立てるのも、芝居として面白味のある中には這入らない。この方面から考へて、悲哀な運命を持つてゐる歴史上の人物は、平清盛を差置いては、外には誰があるか、誰もな

いと思ふ。

「時代の思潮」 その代に於ける世の中一般の思想。

「交渉」 かゝりあひ。關係。

「破綻」 衣服のやぶれほころびる義から出た語で、事業が破れて立ち行かぬこと。茲は、偉人の生活や計畫が破壊されることをいふ。

「孤立」 他から離れてひとりぼつちであること。茲では、實世間を超越して、時代の大勢と交渉を持たない、といふ意。

「敢て」 少しも。強ひて、の意から轉用したもの。

「與らず」 關係はしない。茲では、上文を受けて、面白味のある戯曲の中には這入らない、といふ意。

「紛紛擾擾」 種々様々に入り亂れる有様。ごた／＼と。

「群集」 むらがり集る人々。普通一般の人々。茲では、「偉人」に對して用ひたのであるから、「くだらぬ多數の人間ども」の意に解する。

「蛙鳴蟬噪」 「蛙鳴蟬噪」を互文法によつてあやなした句。蛙や蟬が鳴きさわぐやうにやかましいこと。

「悲劇的運命」 悲哀の運命。

「悲劇」 悲哀な事を脚色し(組立て)た演劇の義を、茲では單に、悲哀、の意に轉用したのである。

「他に誰かある」 ほかに誰があるか、誰もない。

【本文の引用書】 東園遺稿。「平家物語」の一節。

二八 業平の歌

業平の歌は眞率にして虚飾なく、直下に人情を傾倒して餘蘊なし。かくして彼は平安朝最初の第一の歌人にして、またこの朝を盡しての第一等の歌人なり。唯、この朝の末にありて、よくその壘を摩し、時に一頭地を抜きさへもせしもの西行法師あり。西行は自然の懷に隠れ、業平は人生の波に漂ふ。西行は出でて天地の間に放浪せしに、業平は人生を内觀して、性情の波瀾を詩化せり。

(藤岡作太郎)

【眞率】 【虚飾】 【直下に】 【人情を傾倒す】 【餘蘊】 【壘を摩す】

【一頭地を抜きさへもせしもの】 【自然の懷に隠る】 【人生の波に漂ふ】

【放浪す】 【内觀す】 【性情の波瀾】 【詩化す】

○ 廣島高等師範學校

要旨

在原業平は、平安朝第一の歌人で、人情に關する歌を詠じ、西行法師は、業平に匹敵する歌人で、自然に關する歌を詠じたことを論じてゐる。

釋義

【業平の歌は、眞率にして虚飾なく、……性情の波瀾を詩化せり】 在原業平の歌は、ありのままであらうはべの飾がなく、すぐさま人情を述べ盡して餘す所がない。かういふ歌人であるからして、彼は平安朝の最初に出た第一等の歌人であつて、又平安朝を通じての第一等の歌人である。唯、此の時代の末期に當つて、技倆がよく彼に匹敵し、時としては彼よりも一段抜け出ることさへもした歌人に、西行法師が居た。西行の方は、自然の奥深いところに入り親んで、一生を送り、業平の方は、人生の哀樂の出來事に身を寄せて、一生を送つた。西行の方は、この俗の世を離れて、天

地自然の間にさまよひ歩いたのに、業平の方は、俗の世に居て、人生を内部から觀察して、人の性質感情の變化の多い有様を美化して歌に詠み出した。

「業平」 在原業平。歌人。阿保親王の第五子で、行平の弟。天長中、姓在原を賜つた。容姿閑雅。最も和歌に長じた。右近衛中將であつたので、在五中將といふ。元慶四年五月に卒した。年五十六。伊勢物語の作者に擬せられてゐるが、論評區々として定まらない。(一四八五—一五四〇)

「眞率」 天眞のままに飾らないこと。

「直下」 たゞちに。すぐさま。

「人情を傾倒して」 人情をぶちまける。

「傾倒」 傾けて内にある物を出し盡すこと。

「餘蘊」 あますところ。

「平安朝」 桓武天皇から安徳天皇までの時代。中古。

「この朝を盡して」 この時代を通じて。

「その壘を摩す」 敵壘に迫り近づく、の意から轉じて、地位技倆が殆ど追ひつく(匹敵すること)。

「時に」 時としては。時によつては。

「一頭地を抜きさへもせしもの」 それよりも一段抜け出るまでになつた者。

一頭地 頭の高さ、の意。

「西行」歌僧。名佐藤義清。もと鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、後、出家した。本書中篇、藤篋冊子鈔、四の釋義を参照されたい。

「自然の懐に隠れ」 自然の奥深い所に這入りこむ、意。俗界をはなれて、自然に親んだことをいふ。

「人生の波に漂ふ」 人生のさまよひの喜怒哀樂に浮沈して一生を送つたこと。人生の哀樂の出来事に身を寄せて、と解く。

「天地の間に放浪せし」 天地自然の中にさまよひあるいたことをいふ。

「人生を内観して」 人生を内部から観察して。

「性情の波瀾」 人間の性質感情のさまよひの變化。

「詩化」 想像で美化すること。詩歌文章に美しく描き出すことをいふ。

【本文の引用書】 國文學全史平安朝篇。一冊。我が國の文學史の書。

二九 西行は生れながらの歌よみ

作る者ではない。丁度風が吹いて来ると、それにつれて松が音を立てると同様に、彼の歌も感興が胸に起つて来ると、それにつれて自然に出来たのであつた。それ故に、その歌の調子は必ず自然の趣を離れないで（自然的であつて）、無理に拵へたやうなものがない。彼の歌は分り易くありのままを詠ずることを本旨としてゐるけれども、丁度風が烈しく吹くと松の鳴る音も強くなると同様に、胸中に起る感情が激しいと、歌の調子も亦強くなるのは自然の勢である。たまには、美しくおだやかな調子のももあるけれども、わざと、人爲的の細工をしないから（技巧を加へないから）、その自然に出来上つた詩の美しさは、千年を経た後世（今日）に於ても、いよゝその價值を認められ、後世の人をして限りなく仰ぎ慕はさせるのである。

「天籟吹來つて松濤即ち鳴る」 譬喩の句。それ故その下には、「彼の歌も感興が胸中に湧くと、自然に口に發したのである」といふことを説かなくてはいけない。

天籟 天然自然の聲。茲は、風のこと。

松濤 松風の音。松が風に吹かれて發する聲。松風の音が、濤の音に似てゐるからいふ。

「その聲自然を離れず」 西行の歌が、如何にも自然的で無理に作爲したやうな所がないこと。之に反して、感情のままを歌はずい

西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤即ち鳴る。その聲必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風妻じければ、鳴ることも亦強し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は、千歳の下愈光を増して後人をして渴仰止まざらしむるなり。（藤岡作太郎）

【天籟】「松濤」【自然を離れず】「率直」【風妻じければ云云】

【詩曲】「天成の詩美」【千歳の下】【渴仰】

○小樽高等商業學校

○福岡女子専門學校

要旨 西行法師は天才の歌人であつて、その歌の趣は、自然のままであると、その歌風を論評してゐる。

釋義

【西行は生れながらの歌よみにして、……後人をして渴仰止まざらしむるなり】 西行法師は天才の歌人で、歌が自然と口を衝いて出た人であつて、感興が湧かないのに、態々工夫して歌を

ろいろと工夫し、語句を修飾して作つたものならば、之は、自然から離れた歌である。

「平易率直」 やさしくてありのままな事。

「旨とす」 第一とする。主とする。

「風妻じければ鳴ることも亦強し」 譬喩の句。風が烈しく吹くと、松のたてる音も高い。「胸中に湧く感情が強いと、出来た歌も調子が強い」といふことを譬へていふ。

「婉曲の響」 美しくかどだたぬやうに詠まれてゐる調子の歌。

「天成の詩美」 自然に出来た詩の美しさ。

「千歳の下」 千年を経た後世でも。

「渴仰」 一心に仰ぎ慕ふこと。

【本文の引用書】 國文學全史（平安朝篇）。

三〇 俊成の詠ずるところ

藤原俊成の詠ずるところ、艶麗にして幽婉しかも力めて高雅の趣を脱せざらむことを期す。渾然たる美玉、毫も斧鑿の痕なきが如しといへども、これなほ琢磨の果なり。天受の才は才なりといへ

ども、放縦の才にあらすして、折衷の才なり。學を積み、想を練り、苦心慘憺として、遂に一家を成す。かれの歌は、村舎の白梅、東風に野香を恣にするものにあらすして、瓶裏の紅梅枝を矯めて形を正せるものなり。(藤岡作太郎)

〔幽婉〕〔渾然〕〔斧鑿の痕〕〔琢磨〕〔放縦の才〕〔折衷の才〕

〔苦心慘憺〕〔野香〕

○海軍兵學校

要旨 藤原俊成の歌は自然の美でなくて、人工の美の趣を有してゐると、その歌風を論評してゐる。

釋義

【藤原俊成の詠するところ、……枝を矯めて形を正せるものなり】 藤原俊成の詠む歌は、はやかで美しく、奥ゆかしくしとやかな趣があつて、その上勉めて高尚で上品な趣を失はないやうにして居つた。譬へていふと、圓々として些かの疵もない美しい玉のやうで、少しも細工をしたあとがないやうに見えるけれども、その美しさは、やはり、玉を撃つたり磨いたりして立派なも

のに仕上げるように、技巧を凝した結果出来上つたものであるといふ感じのするやうなものである。それであるから、俊成の歌才は生れつきの才には相違ないが、所謂、眞の天才なるものによくあるやうに、自分の才にまかせて、勝手氣儘に詠むといふ風ではなく、古人の歌の中から取捨してよい所を取集めて工夫を凝すといふ側の天才である。學問を積み、思想を練り、竝々ならぬ苦心を重ねて、たうとう一家を成したのである。彼の歌は、田舎家に咲いてゐる白梅が春風に吹かれて、ありのままな自然の香を自由に放つてゐるものやうな自然的の風趣(手の加はらない美しさ)があるものではなくて、床の間の花瓶に活けてある紅梅の枝振を曲げ直して木の恰好を整へたやうなものに譬へられるものである。即ち、その歌は美しいことは美しいが、それは自然の美しさではなくて、技巧を加へて洗練された美しさである。

「藤原俊成」 歌人。千載和歌集の撰者。俊忠の子。初名顯廣。後、俊成と改めた。後鳥羽天皇の朝に、正三位皇太后宮太夫となつた。其の家五條にあつたので、五條三位と稱せられた。安元二年官を辭し、薙髮して釋阿といつた。建仁三年九十の賀を和歌所に賜ひ、御製の和歌及び鳴杖を賜つた。元久元年に薨じた。年九十一。著書には、古來風體抄、家集に長秋詠草がある。子の定家、亦家人として有名である。(一七七四—一八六四)

「幽麗」 はでやかでうるはしい。

「幽婉」 おくゆかしくしとやかである。

「しかも」 その上。

「高雅」 高尚で上品である。けだかくみやびやか。

「渾然」 玉の圭角なく整つてゐる有様。この上に「譬へていふと」の語を補つて解くがよい。

「斧鑿の痕」 斧や鑿で切つたりうがつたりしたあと。即ち、人工(細工)を加へたあと。

「琢磨の果なり」 上文に應じて、「磨き上げた結果である」といふ感じがするやうなものである」と解く

「琢磨」 琢は、椎や鑿で撃つて玉を治める。磨は、玉をみがく。熟して、玉石をみがくこと。轉じて學徳をみがき修める義にも用ひるが、茲は、本義。

「放縦の才にあらす」 心のまゝに發揮するといふ才ではなく。又は、勝手氣儘に詠むといふ風ではなく、と解く。

「折衷の才あり」 古歌の中から取捨し、その程よい所を取つて作り出すといふ側の才である。

「折衷」 彼此長短を取捨して適當なものを作り出すこと。

「苦心慘憺」 心を苦しめて工夫をすること。

「一家を成す」 他と異つた一流派を作ること。

「村舎の白梅、東風に野香を恣にするものにあらずして」 自然的風趣のあるものでなくて、の意に譬へたものであるから、下に、此の意を補つて解く必要がある。

三一 權貴の家に生れたるもの

權貴の家に生れたるものは、深宮の中婦人の手に育ちて、絶えて人生行路の險を知らず、瞳を動かせば膏粱前に湧く、また世に一椀の食に飢うるもの

【本文の引用書】 國文學全史(平安朝篇)。

「瓶裏の紅梅、枝を矯めて形を正せるものなり」 技巧を加へたものである、の意に譬へたものであるから、下に、此の意を補つて解く必要がある。

「瓶裏の紅梅」 花瓶に活けた紅梅。

「矯めて」 直す、意。即ち、曲がつてゐるのを伸ばしたり、かどんでゐるのを直くすることなどをいふ。

あるを知らむや。而も一旦運命の變に遇へば概なき小舟のいかで暴風怒濤に堪ふべき。忽ち困憊して、一點の泡沫消えて行くところを知らず、夢よりもはかなくして再び得難き此の生を終ふることその例多し。(藤岡作太郎)

【權貴の家】「深宮の中」「人生行路の險」「膏粱前に湧く」

【困憊】「一點の泡沫消えて行くところを知らず」

○山梨高等工業學校

要旨

深宮に榮華の生活をしてゐた平安朝の貴族が、一旦運命の變に遭つて、はかなく亡んで行つたことを述べてゐる。

釋義

【權貴の家に生れたるものは、……夢よりもはかなくして再び得難き此の生を終ることその例多し】 權力があつて身分の高い家柄に生れた者は、幼い時分から、奥深い御殿の中に、女の手で育てられて全く世渡りのつらさを知らず、ほしいと思へば何時でも御馳走が目の前に並んでゐて、樂々と食べられるとい

ふ風であるから、世間には一椀の食でさへ自由を得られない者があるといふことなどを、どうして知らうか、知りはしない。然し一旦運命が衰へて不幸に出遇ふと、譬へば概なき小舟が暴風や怒濤に遇つたやうなもので、どうしてそれに堪へて行くことが出来ようか、出来ない。忽ち苦しみ疲れて、恰も一個の水の泡が何處ともなく消えてしまふやうに、此の世から姿を消してしまひ(死んだり、世の中から忘れられたりしてしまふことをいふ)、かうして夢よりもはかなく、而も二度とは得られない此の人生を終へるのは、例の多いことである。

【權貴の家】 權力あり身分の高い家柄。

【深宮の中】 奥深い御殿の中。

【人生行路の險】 人は一生の間に、いろ／＼の危険や困難に出遇ふ。それを、道中に険しい山坂などのあるのに喩へたのである。

【隨を動せば】 極めてたやすい動作の例を示したものである。少しも骨を折らないことを意味する。

【膏粱】 膏は、肥えた肉、粱は、よい穀物。熟して、非常な御馳走、の意。

【前に湧く】 目の前にずらりと並んでゐる。

【櫂】 船を進める具。「楫」に同じ。「舵」は、船の方向を定める具。

【困憊】 苦しみ疲れる。

釋義

【内部に待つものなければ、……これに先ちて邦人の心にその素なくんばあらず】 すべての物事は、内部に下地が出来て待受けてゐるものがないと、外部から、どんな力がやつて来ても、その力の作用を受入れるものではない。例へば、春の風や春の雨は、草木の生え出る原因となるものであるけれども、若し草木の種子が地下に含まれてゐなかつたらば、どうであらうか、決して草木の發生するものではない。又流行病がどんなに蔓延の勢をあげて来ても、常に十分健康で、内部に故障のない身體を冒し苦しめる事が出来ないやうなものである。それと同じやうに、日本人が禪宗の教などのさしひびきに因つて、美術に對する感想の移り變りを致したけれども、それよりも先きに、日本人の心に、その外部から來たものを受入れる下地が、ない譯はないのである。

【内部に】 この上に、「總て物事は」の語を補つて解くべきである。之は一般の物事に就ていつたからである。

【外力】 外部から來つて作用する一種の力。

【應ぜず】 受入れない、と解く。

【東風春雨】 この上に「例へば」の語を補つて解くがよい。

【泡沫】 水のあわ。あぶく。

【夢よりはかなくして】 非常にたよりなくあつて、の意。

【本文の引用書】 未詳。(識者の示教を俟つ。)

三三 内部に待つもの

内部に待つものなければ外力の來るに應ぜず。東風春雨は草木發生の因となれども、種子下に含むなくんば如何。疾疫の氣勢を逞しくするも、健全にして内に惱む所なき身體をおかすこと能はず。禪教などの影響によりて、美感の變遷を來せりといふと雖も、これに先ちて邦人の心にその素なくんばあらず。(藤岡作太郎)

【外力】「疾疫の氣勢を逞しくす」「内に悩む所」「美感」「素」

○高等學校

要旨

内部に待受けて居るものがあるので、外部から來る物を受け入れるのであるといふ事を述べてゐる。

東風、春風。

「因」原因。もと。

「如何」 「どうであらうか、それは、決して發生しない」といふ風に、自問自答的に解くべきである。

「疾疫」 疾は、病、疫は、はやり病。熱して、流行病。

「氣勢を逞しくす」 蔓延の勢をはげしくする。猖獗すること。

逞しくするも、烈しく襲つて來ても。實は「烈しくする事も」の意であるが、茲は、「する」を、「すれども」の意に解すべきである。

「内部に慍む所」 内部に弱つてゐる所。體内の故障、即ち、外力におかされ易い部分。

「禪教」 禪宗の教。我が邦上代の建築・繪畫・彫刻などの美術は、禪宗などの影響によつて發達して來たのである。

「美感」 美術に對す感想。

「來せりといふと雖も」 致したけれども、と解く。

「素」 下地のこと。

【本文の引用書】 東圃遺稿。二册。論說・隨筆・創作等を收む。

三三 成敗と是非

成敗と是非とは、判然別事に屬す。成敗は當時の

形勢によりて別れ、是非は後人の公説によりて定まる。若し成者皆是にして、敗者必ず非ならば、君子不遇の歎あらずして、正人雪冤を後代に望む概なかるべし。(島田三郎)

○ 慶應義塾大學豫科

○ 專門學校入學資格試験

○ 京城高等商業學校

○ 慶應義塾大學豫科

○ 京城高等商業學校

要旨 事業の成功と失敗と、その事業の正と不正とは別事であるといふことを論じてゐる。

釋義

【成敗と是非とは、判然別事に屬す。……正人雪冤を後代に望む概なかるべし】 人の事業の成功と失敗と、その事業の正と不正とは、明かに、全く關係のないものである。即ち、正しいれば成功し、不正であれば失敗するといふやうな因果關係のあるものではない。そのわけは成功とか失敗とかいふ事は、その時の成行に因つてきまるものであるが、その事業の正不正といふ事は、後世の人の公平な判断によつて定まるものであるからであ

る。然るに茲に、成敗と是非を同一視して、もし、成功した者は皆正しくあり、失敗した者は必ず不正であるとすれば、智徳を具へた人格者が、事業に失敗したといふ不仕合な境遇に泣くといふこともなからうし、又正義の人が、生前に無實の罪を受けてその汚名をすゝぐことを後世の人に望むやうな歎はしいことも起らないであらう。ところが事實は、君子正人であつて不遇のうち、ちにより、好悪な者であつて榮える者があるのであるから、成敗と是非とは無關係なものであるといふことがわかる。

【成敗】 (一) 成功と失敗。(二) 勝と敗。(三) 「セイバイ」とよむ。政事をとりに行ふこと。しおき・處分・處罰。罪人を斬りすてると・斬罪。茲は、第一義。

【是非】 道理上の正と不正。正理と非理。

【判然】 はつきりと。明瞭に。

【別事に屬す】 全く關係がないものである。はなれ／＼のものである、の意。

【形勢】 事情。成行。

【公説】 公平な判断。世上一般の意見。

【君子】 智徳を具へた人。

【不遇】 時勢に合はないで不仕合な境遇にあること。

【雪冤を後代に望むの概】 無實の罪をうけて、生前に之を清める

ことが出來ず、後世になつて、よく時勢を達觀する人が出て來て、自分の無實の罪を知つて之を清めてくれるのを待つより外はないといつて慨く、の意。

雪冤 雪は、すゝぐ、冤は、無實の罪。熱して、無實の罪や惡名を受けたことを洗ひ清める。

慨 慨歎。なげくこと。

【島田三郎】 新聞記者・政治家。舊幕臣鈴木知英の三男。沼南と號した。嘉永五年に生れ、出でて島田氏を繼いだ。幼にして聰慧、夙くから昌平齋に入つて漢學を修め、中頃、静岡藩の沼津兵學校に入つて英・漢・數學を學び、後、大學南校・大藏省附屬英學校に學んだ。東京横濱毎日新聞(今の東京日日新聞の前身)の主筆となり、始めて換氣界に名を知られた。後、元老院に出仕し、文部權大書記官等に歴任したが、程なく官を辭した。明治十一年櫻鳴社を組織して地方に遊説し、政治思想を鼓吹した。辯舌が流暢であるとの評が高かつた。十四年改進黨の成るや、その創立に與つて力があつた。後、神奈川縣縣會議員となつた。二十二年歐米を漫遊し、翌年歸朝、初期以來引續いて神奈川縣選出衆議院議員となり、清節を以て許された。四十一年多年社長として經營し來つた東京日日新聞を他に譲つて新聞社會を退き、専ら政治に力を致した。その著に泰西通鑑・條約改正論・英國憲法史・開國始末・如是我

觀等があり。大正十二年歿。年七十二。(二五一—二五八三)
【本文の引用書】 開國始末。一冊。我が國の開國始末の論集。

三四 言論の自由社會に存せず

言論の自由社會に存せず。編史の業政務の一部たりし世に在りては、史氏興朝の爲に回護の筆を執るが故に、記事に曲筆多く、批評に公正を得難かりしなり。その積習の風を成すや、何等の拘束なき人が、この時期既に去りたる世にありて、筆を執りても、亦成敗と是非とを混入してみづから曉らず。陋といふべし。(鳥田三郎)

【史氏】 興朝 【回護の筆】 曲筆 【その積習の風を成すや】 何等の拘束なき人 【陋】

○専門學校入學資格試験

要旨 成敗と是非とを混同してゐる史家の不見識を論難してゐる。

釋義

【言論の自由社會に存せず。…亦成敗と是非とを混入してみづから曉らず。陋といふべし】 言論の自由がまだ社會に許されてをらず、歴史を書く仕事、政治上の事務の一部分であつた時代に於ては、此の政府に使はれてゐる歴史家が、當時新に興つた政府のために辯護の文を書くから、歴史に書いてある記事には、事實を曲げて書く事が多く、史上の事件に對して、公明正大な批評を下す事が出来なかつたのである。かく當時の新政府を辯護して書くといふその事が、永い間の風習となると、その政府から何等の束縛をも受けてゐない人が、かういふ時期(言論の自由社會に存せず。編史の業政務の一部たりし世)が去つてしまつて、自由に書いても差支ない時代に筆を執つても、やはり昔と同様に成功失敗と正理非理とをごつちやにして、即ち、現政府(成功者)を必ず是として辯護するやうに、成功と是と、失敗と非とを同一視して、而も自分では、その間違に氣が附かないのである。之は實に不見識なことといはなければならぬ。

【言論の自由】 法律によつて、ある制限の下に言論の自由が認められてゐること。即ち、社會の秩序や風俗を亂さぬかぎり、世をそしり、時事を論じて、自由であること。

「編史の業」 歴史を編纂する仕事。

「史氏」 歴史家。

「興朝」 新に起つた朝廷。現政府。(此の文は日本といふ狭い範圍についてのみいつたのではないのである。)

「回護の筆を執る」 辯護するやうな書き方をすること。辯護の文を作ること。(史家が興朝を辯護して書くのは、成功者即ちは、失敗者即ち非であるとする態度である。)

「曲筆」 事實を曲げてかくこと。

「公明」 公明正大。

「積習」 長い間の習慣。

「風を成す」 一般の風潮となる。

「拘束なき」 束縛を受けない。政府を辯護しなければならぬといふ必要のないこと。

「この時期」 言論の束縛された時期。

「筆を執りて」 歴史を書くことをいふ。

「陋」 いやしいこと。見識のないこと。

【本文の引用書】 開國始末。

三五 二葉に籠れる力

菽の初、菘の初、かはゆき甲拆の姿のしをらしや。地壓すれば芽ささむとして芽さし難きまま伸びむとして屯り、身を屈めて一力入れ、根入漸く足りて辛うじて世に出でたる嫩青微緑柔かにして夢を結べる如き、さはらば消えなむおぼつかなさの、二葉に籠れる力こそめでたけれ。(幸田成行)

【菽】 豆 【菘】 甲拆 【根入】 嫩青 【微緑】 【おぼつかなさ】

○東京商科大学豫科

要旨 豆や菜の二葉の有様の趣味あることを記してゐる。

釋義

【菽の初、菘の初、…おぼつかなさの二葉に籠れる力こそめでたけれ】 豆のはえはじめや、唐菜の生えはじめのかはい二葉の姿の愛らしいことよ。それ等の物の、土地がおさへつけないので、芽が萌え出ようとしても萌え出すことがむづかしいので、伸び出ようとしては止まり、自分の身を屈めて一力を込め、根ざしがだん／＼と整つてから、やつと世の中に出たところの、若緑

の葉が柔かてぼんやりと夢を見て眠つてゐるやうな、もしも觸れたならば消えるやうな弱々しい趣をした、其の二葉の中に籠つてゐる力こそ面白味があるわい。

「菽」 豆類の總稱。

「菘」 唐菜のこと。葉は燕菁カキョウに似て青白い。

「甲拵」 訓カハワレ、カホワリ。草木の芽の出ることをいふ。茲は、菜などの種子の殻皮がさけて、二葉の萌え出したもの。

「根入」 土中に人つた根ざしのこと。

「世に出てたる」 直接には、下の「二葉」に、連続するのである。

「嫩青微緑」 茲は、わかみどりの葉。芽を出したばかりの二葉をいふ。嫩青も、微緑も、共に、わか葉のみどりの意。

「夢を結べる如き」 この上に「ぼんやりと」を補つて解くがよい。

「おぼつかなさ」 弱々しく危い有様。

【幸田露伴】 文學博士。名は成行。文壇の老大家。慶應三年江戸に生まれた。博學多識、夙に小説家として名を成す。其の處女作は、明治二十三年の春雑誌都の花に載せた「露團圓」である。同年秋「風流佛」を新著百種に出して大いに文名を揚げ、尾崎紅葉と共に文壇の代表者となつた。此の年、氏は國民の友に「西鶴論」を載せて大いに西鶴研究を鼓吹して文壇に大刺戟を與へた。小説としては「五重塔」「二日物語」等が傑作と稱せられる。其の文は

西鶴から出て、更に漢語・佛語などを自由に攝取して一家の風格をなし、他人の追隨を許さない。又其の作中の人物も、理想的のもので、どの作にも氏の人生觀や理想が現はれてゐる。小説家としては、明治三十六年に起稿した長篇「天うつ浪」を完成せず筆を絶つたまゝで、新作を出さない。其の後は専ら、修養論や隨筆などを書いてゐる。明治四十一年九月京都文科大學講師となり、明治四十四年文學博士の學位を授けられた。著述に、葉末集小説集・露伴叢書・調言・長語・潮待ち草・心のあと・天うつ浪・頼朝・努力論・幽秘記・洗心録・冬の日抄・長和長年・蒲生氏郷等、多方面に亘つて甚だ多い。(二五二七)

【本文の引用書】 洗心録。一册。處生・觀賞等の隨筆文集。

三六 無言の力

老将は兵を談ぜず、良賈は深く藏す。言多きものは卑しとせられ、語少きものは憚らる。言を以て招くは、無言を以て招くに如かず。語を以て斥くるは、無言を以て斥くるに如かず。桃李^{タウリ}そもそも何も何を言ひて、下自ら蹊^{シタカヒ}をなせるや。宗廟^{ソウボウ}そもそも

何を語つて、人敢て讀さざるや。(幸田成行)

【老将】 【良賈】 【憚らる】 【桃李^{タウリ}】 桃李^{タウリ}も何も何を言ひて云云

【宗廟】

○東京高等師範學校

○高等學校

○高岡高等商業學校

○大阪藥學專門學校

要旨 無言は却つて言ふにまさるといふことを説いてゐる。

釋義

【老将は兵を談ぜず、良賈は深く藏す。……宗廟^{ソウボウ}も何も何を語つて、人敢て讀さざるや】 兵事に經驗を積んだ大將は、無闇に兵事の話をしてないのであり、又よい商人は、品物を深山持つてゐても深く仕舞ひ込んで置いて店頭飾りたてたりしないものである。猥りに語り、猥りにあらはすと、いふことは卑しいことで、却つてその人の價値をおとすものである。これと同じ道理で、言葉數の多い人は、他人から下品であると輕蔑され、言葉數の少ない人は、他人から畏敬されるのである。それ故、言葉でもつて人を引

き寄せようとするのは、黙つてゐて(徳を以て)人を引き寄せるのに及ばないし、言葉で人を排斥するのは、黙つてゐて自然に人を排斥するのに及ばないのである。あの桃李^{タウリ}は一體何をいつて、自然にその下に小徑をこしらへるのであるか、それは何をいはないでも、花の美がある爲に、人が集つて来て小徑が自然とつくのである。人君の先祖の靈屋^{たまや}は、一體何を語つて、人が強ひて其の尊嚴を讀まないものであるか、何も語らないけれども、自然と尊敬されるのである(桃李^{タウリ}の枝の下には自然に尋て來る人が多くて、何時の間に小徑がつくといふが、その桃李^{タウリ}は、一體何といつて人を招いてゐるのか。又宗廟^{ソウボウ}は、人が之を尊敬して敢て讀す者がないが、その廟は一體何といつて人をしてけがさせないやうにしてゐるのか。)畢竟是等は皆無言であつて、自然さういふ風になるのであるから、人は多言を慎むがよい。

【老将】 經驗を積んだ大將。

【良賈は深く藏す】 よい商人は、品物を店先に出さずに、深く仕舞ひ込んでおく。史記、老子傳に「吾聞、良賈深藏、若^{ハクシテ}虚^{シテ}君子盛徳^{アルモ}、容貌若^シ愚^{ナリ}」とあるに據つて書いたもの。

【桃李^{タウリ}】 桃李^{タウリ}も何も何を言ひて云云。史記、李廣傳に「諺曰、桃李^{タウリ}不^レ言^ハ、下^ハ自成^レ蹊^{ナリ}。」とあるを轉用したのである。但し原本では、有徳の人に譬へた句。

蹊、小徑。

〔宗廟〕 人君の先祖のおたまや。

〔本文の引用書〕 長語。一冊。文藝・教訓等の雜纂書。

三七 大丈夫の覺悟

大丈夫苟も身を學藝に委ねむとせば、まづ受發の二途に於て大丈夫の覺悟あるを要す。發とは外に内の發するなり。受とは内の外に受くるなり。受くることは、須く大海の百川を呑むが如くなるべし。發することは、宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらむことをこれ嫌ひて、川の大小の小を嫌はず、發することの豊ならざらむことをこれ恐れて、方の東方の西を問はず。之を受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。受くるに嫌ふ所あり發するに問ふ所あるは、兒女の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。(幸田成行)

〔大丈夫の覺悟〕 〔學藝〕 〔受發〕 〔甘雨〕

○東京外國語學校

要旨 大丈夫たる者の、受動發動の二事についての覺悟の必要なことを説いてゐる。

釋義

〔大丈夫苟も身を學藝に委ねむとせば、……兒女の情のみ大丈夫の覺悟にあらず〕 堂々たる男子が、かりにも一身をうち込んで學藝を究めようと思ふならば、まづ知識藝能を受入れる事と、修得したものを發表する事との二方面に於て、男子たる立派な決心がなければならぬ。〔冒雨〕 發といふのは、修得したものを外に發表することを意味し、受といふのは、知識藝能のやうなものを外から受入れることを意味する。〔全論に入る準備〕 そこで受ける態度はどうしたらよいかといふと、大海があらゆる川の水を呑み込んで、あの大をなすやうに、どしどし受入れるがよい。發表する場合は、よい雨が八方にそよいで萬物をうるほすやうなあの態度を學ばなければならぬ。それ故、受入れることの多くないことを心配して(即ち、多く受入れようと思つて)、海が川の大小を選ばずにその水を受入れるやうに、偉い人からもつまらない人から

も、大著からも小著からも、即ちどんなものからでも、よいこと

ならば受入れるやうにする。又發表することの十分でないことを心配して(即ち、多く發表しようと思つて)、方の東西を問はずどしどし發表するやうにする。これが受發の二途に於ける堂々たる

男子の立派な決心である。(本論) 然るに受入れる場合に、感情的に嫌つて或ものを拒んだり、發表する場合に、彼此と相手を選んだりすることは、兒童や女子のやうな偏狭な心といふもので、堂々たる男子の決心ではないのである。(大丈夫の覺悟の反對を述べて、全支を引締めた結尾)

〔大丈夫〕 堂々たる男子。

〔學藝〕 學問技藝。又、單に學問の意にもいふ。

〔受發〕 受は、受動の義で、外部から我に受入れること。即ち、他人の言説等を受入れることなどである。發は、發動の義で、外部に向つて我から發すること。即ち、自己の意見を發表することなどである。

〔甘雨〕 草木を繁らせるよい雨。慈雨。

〔受くることの〕 この上に「故に」を補つて解くがよい。

〔方の東・方の西〕 方角の東西。

〔受くるに〕 この上に、「然るに」を補つて解くがよい。

〔兒女の情〕 兒童や女子のやうな偏狭な心。つまらない女子供の

考。

〔本文の引用書〕 諷言。一冊。文藝・教訓の雜纂書。長語と姉妹篇。

三八 批評

士の身を學藝に委ぬる者、誰か生を終るまで、人の批評を被らざる者あらむや。我思ふ所あり、言ふ所あり、人も亦思ふ所あり、言ふ所あり。我我が口を箝して人の言に就くことを難しとせば、人をして其の舌を結んで、我が意に従はしめむとするも、亦甚だ難からずや。批評の我に加へらるるや、堯舜の聖と雖も、亦之を如何ともするなし。況や身死し肉爛れても、日に新に、日に新に、批評の鞭笞を我が枯骨に加ふる士の蜂起簇生せむも、亦未だ知るべからざるをや。(幸田露伴)

〔我我が口を箝す〕 〔舌を結ぶ〕 〔日に新に〕 〔批評の鞭笞〕

〔枯骨〕 〔蜂起簇生〕

○京都高等蠶絲學校

要旨 學藝に身を委ねる者は、誰だつて皆人から批評されるものであるから、人の批評などを氣にかけてはならぬといふことを戒めてゐる。

釋義

【士の身を學藝に委ねる者、誰か生を終るまで、……亦未だ知るべからざるをや】 男たる者が學問藝術の爲に一身をささげてかゝる以上、誰だつて一生涯人から批評されない者はなからう。自分に意見があつて、自分でそれを言ふとすると、他人も亦自分と同じく意見があつて、言ふことがある筈である。自分が強ひて自分の口をふさいで、人の言ふことに従ふやうな事が出来ないとするならば、他人をしてその口をふさいで、自分の考通りにならせようとするのも、亦甚だむづかしいことではあるまいか。自分が批評を受けるといふことは、たとへ堯舜のやうな聖人であつても、どうすることも出来ない。まして、吾々普通の人間に於ては死後この肉が腐つてしまつてからでも、常にいろ／＼と新しい批評を加へて、やかましくいふ人が澤山出て來るかも知れないのであるから、人から批評されることを氣にかけらぬやうな事があつて

三九 趣味饒なる人

足らざることを知るは、滿つるに到るの路なり。……趣味至らざるを悟るは、上に向ふの途なり。吾が趣味の猶足らざるを知り、猶至らざるを悟る者は幸なり。其の人の趣味將に漸く進み、漸く長ぜむとす。

【本文の引用書】 諺言。

「蜂起蒼生」二語とも、むらがり起る、意。

「枯骨」死後、の意。

「舌を結ぶ」「口を箝す」と、同意。

「日に新に」常に新しく、の意。大學にある語。本書、中篇、花

月草紙鈔、一五の**釋義**を参照されたい。

「鞭笞」むち。きびしい批評をいふ。

「口を箝す」口をふさぐ、意。

ていふ語。

「我我が口を箝して」讀方に注意。上の我は、下の「人」に對し

はならない。

點をあげてゐる。

釋義

【足らざることを知るは、滿つるに到るの路なり。……趣味饒なる人は幸なるかな】 凡そ自分の足らないといふことを知ること、心を改めて勵むから、滿ちることに達することの順序である。又自分の至らない事を悟ることは、心を改めて、進むから、實に向上發展して行くところの順序である。自分の趣味のまだ足らないことを知り、まだ至らぬことを悟る人は幸福である。それに因つて、その人の趣味がそれから段々進み、段々發達しようとするのである。之に反して、自分の趣味の幼稚な事をも顧みないで、自分の善いとするものを必ず善いとし、自分の面白いとするものをいつも面白いとして、高い趣味に進んで行つたり、卑しい趣味を改めたりすることをしない人は不幸である。そのやうな人は、その人の花のやうな美しい心(趣味識)が、とうに石のやうに冷え固まつてしまつてその心の活動力を失つてゐるから、その幸福を受けられないのである。元來、慾望といふものは、それが達せられない場合には、我に不満を覚えさせるから、我を束縛する手かせ足かせのやうなものである。それ故、そこには、自由といふものが見出されない。之に反して、趣味は、自分でたゞあるがま

吾が趣味の幼きをも省みで、我が善しとするものを必ず善しとし、我がをかしとするものをいつもをかしとして、高きに遷り、卑しきを改むることをせぬ者は幸無し。其の人の心の花既に石と化りて、生命を失ひ居ればなり。慾望は我を桎梏す。自在無し。趣味は我を繫縛せず。自由あり。其の物を得ざれば苦み、其の願を遂げざれば惱み、我が心を外の物の奴婢として、その使役するところとなるは、慾望の然らしむるなり。慾望は人を窘め、趣味は人を活す。趣味饒なる人は幸なるかな。

(幸田成行)

【趣味】 【心の花】 【慾望】 【桎梏す】 【自在】 【繫縛す】 【奴婢】

○高等學校

○桐生高等工業學校

要旨 趣味を論じたもので、先づ初に趣味を長ぜしめる法を説き、次に慾望と趣味とを對照して、その相異なる

まに楽しむだけであるから、決して自分の心を束縛しない。故にそこに自由が見出される。その所望の物を得ないと苦しみ、その願望の事を遂げないとなやみ、自分の心を外物の奴婢として（自分の心を外物から使ひ廻される者として）、外物の使役する物となることは、自分の欲望から起るのである。そのやうに、欲望は人の心を窮屈に思はせるし、趣味は人の心が主となつて、外物はその従となるのであるから、人の心が之に悩まされるやうな事は全然なく、人をして常に活々とした気分にならせてくれる。それゆゑに、趣味の豊富な人は幸福であるのである。

「趣味」或物に對して特に興味を持ち、それを味ひ楽しむ事が一つの性情となつてゐる状態をさしていつたのである。趣味性のこと。

「滿つるに到るの路」滿ちる事に達することの順序。猶、此の上「心を改めて進むから」の語を補つて解くがよい。路、筋道、又は順序、の意。

「上に向ふ途」向上發展するところの順序。（人は、もう之で完全だと思へば安心して努力せず、不完全だと知ると、大いに努力するものであるから、向上發展も期せられるわけである。）

途、「路」と、同意。
「高きに」高い趣味に、の意にとる。

棠の花の香なきを簪にすとも、薔薇の一輪の白く合めるを簪にすとも、其の人の趣味より見て善しと爲さむには、木の端・竹の片を簪にすとも、亦復満足の喜悅はあべし。」（刪修）

四〇 趣味の善悪は風俗の本源

順序をいへば、時勢が一代の風尚を定めるのであるが、其の風尚が原因となつて、後の時代精神を涵養する例もあるから、國民全體の趣味の善悪は風俗の本源である。かの文藝を重んじて、移風易俗の要具とするのも、それらが趣味性涵養の最大機關であるから、國民の善悪美醜の評價力、即ち理想建設の地盤は、偏に此の趣味性の高下によつて定まる。（坪内雄藏）

〔風尚〕〔移風易俗〕〔善悪美醜の評價力〕〔理想建設の地盤〕

○和歌山高等商業學校

要旨

國民全體の趣味の善悪は、その風俗を左右する

「卑しきを」卑しい趣味を、の意にとる。

「心の花」隱喩法。花のやうな美しい心、即ち、趣味識の意。趣味識は、心的作用の美的方面である。それ故、之を花に譬へて「心の花」といつたのである。

「生命を矢ふ」いつも自己を標準とし、自己満足をして向上發展の力を缺いてゐるからさういふのである。

「桎梏す」束縛すること。足械あしかぎ手械てかぎでしる義から出た語。

「自在なし」この上に「故に」を補つて解くがよい。

自在、下にある、自由じゆうと同義。何等の束縛もなく、思ふやうに動けること。

「繫縛せず」束縛しないこと。つなぎしばられない意。

「窘め」行きつもらせる意で、窮屈に思はせ、と解く。

「趣味饒なる人は」この上に「それ故に」を補つて解くがよい。

【本文の引用書】洗心録。

備考

原本には、「欲望」の例をあげて、次のやうにかいてある。「欲望」と「趣味」との別を知る資して、茲に擧げておく。

「簪の必ず黄金ならむことを欲し、衣の必ず縮緬ならむことを欲するは欲望といふものなり、趣味にあらず。云々。」といひ、又「根

大本であるといふことを述べてゐる。

釋義

【順序をいへば、時勢が一代の風尚を定めるのではあるが、……偏に此の趣味性の高下によつて定まる】順序をいふと

時世のなりゆきが、其の時代の人々の趣味を高めるのではあるが、其の趣味が原因となつて、其の後に來る時代精神を養ひ育てる例もあるから、國民全體の趣味の善悪は、その風俗を左右する大本であるといへる。（第一節—趣味の善悪は、何故風俗の本質であるかを論じてゐる）

かの文藝を重んじて風俗改良の大事な道具とするのも、その文藝が趣味を養ふ上に非常に有力な役目をするからである。（第二節—挿話として文學と趣味との關係を論じてゐる）

力、換言すれば、理想を築き上げる地盤となる此の力の性質は、全く其の國民の趣味性の高下によつて、其の良否が定まるのである。

（第三節—趣味性の高下と、國民の善悪美醜の評價力の關係を論じてゐる）

〔風尚〕好み、趣味。

〔移風易俗〕風俗を改めてよい方へ導くこと。

〔善悪美醜の評價力〕善悪美醜を見分ける力。

〔理想建設の地盤〕立派な理想を立てるには善悪美醜を見分ける力がなくてはならぬから、善悪美醜を見分ける力を理想建設の地

盤と見たのである。

【坪内雄藏】 文學博士。逍遙と號する。英文學者。早稻田大學名譽教授。安政六年美濃國加茂郡太田村の尾張侯代官町に生れた。明治十六年東京大學政治科卒業。夙に東京專門學校（今の早稻田大學の前身）に教鞭を執り、同校文科の柱石として多くの秀才をその門から出した。又一方、明治新時代の小説劇壇の指導者として、評論に、創作に、實際運動に、その残した功績は顯著であつて、洵に文藝界の一大恩人であるといはれてゐる。殊に劇の改革運動に於ては、或は純正な科白劇と相並んで振事を主とする舞踊劇の成立すべきを主張し、或は新に役者の教育や脚本の試演に従事する計畫を立て、或は劇をして更に民衆的なものにする必要を唱へ、或は見物人の玩弄からも役者の虚榮からも遠ざかつた純一な藝術の創作を樂しむといふ境地に劇を置かうとすることを試みたりした。最近に於ける劇の民衆化運動ともいふべきページエントの企畫及び劇の家庭引入れを企てた兒童劇の草案は、逍遙が常に劇運動の最前線に奮闘してゐることを窺ふべき有力な材料である。特に兒童劇に關する事業は、ページエントに比べて一層有意義の結果を見せることになると思ふ。

著述は、文學その折々・小説神隨・當世書生氣質・桐一葉・牧の方・新曲浦島・沙翁傑作全集の翻譯（二十篇）・わがページエント劇・家

命を有する名篇傑作は、古今東西を通じて極めて少いといふことを説いてゐる。

釋義

【人生は短し。藝術は長し。】……果して多く世に存せりや否や。「人間の一生は短い。然し人間の手によつて作られた藝術的作品は、永久の生命を持つてゐる。」と昔の人は云つてゐる。けれども、この言葉はほんたうに、時の古今洋の東西にわたる間のどれだけの文學なり、藝術なりにあてはめることが出来るであらうか、これにあてはまるものは、極めて少くある。又「英雄や豪傑のすぐれた事業は、朝顔の花が、朝開いて直ぐ凋むやうなはない東の間だけの榮華であつて、長い年月を経た後には、彼等の偉業は空しく山や丘となつて滅びてしまふけれども、此の中にあつてひとり、文學者や藝術家の作つた立派な作品は、空に輝いてゐる日月のやうに、永久に光輝を放つものである。」といはれる。その事はほんたうに實際の事柄であらうかどうか、疑はしいし、古今東西の名篇傑作といはれるもので、今でもやはり眞に人心を激勵奮起させる程の力を持つてゐるものが、ほんたうに澤山世の中に存在してゐるかどうか、さう澤山にあるやうにも思はれない。

【人生は短し藝術は長し】 西洋の諺である。Art is long, life is

庭用兒童劇等、その他なほ甚だ多い。（二五一九）
【本文の引用書】 未詳。（識者の示教を俟つ。）

四一 人生は短し 藝術は長し

「人生は短し。藝術は長し。」と古人は言ひたり。然れども、これ果して古今東西幾何の文學藝術にか適用せらるべき。「英雄豪傑の偉業は、きんぐ 山丘の榮にして、多くの星霜を経たる後には、空しく山丘と化し終れども、ひとり文學者藝術家の大作品は長へに日月を懸く。」といふ。そは果して事實なるべきか古今東西の名篇傑作にして今なほ眞に人心を鼓舞し得る程のもの果して多く世に存せりや否や。（坪内雄藏）

【藝術】 【權花】 【山丘と化す】 【果して】 【鼓吹】

○女子專門學校入學資格試験

要旨 藝術の生命は長いといふけれども、眞に長い生

short. の譯である。

【藝術】 美の表現を目的とする技術、及び作品をいふ。文字によつて表はすものは文學、色彩によつて表はすものは繪畫、音聲によつて表はすものは音樂、形體によつて表はすものは彫刻である。

【權花】 朝顔の花。但しこの朝顔は、今日觀賞用として栽培される朝顔ではなく、むくげの事である。むくげは朝開いて、其の日の夕方萎むから、古は、此の花のことを朝顔といつたのである。

【山丘と化す】 英雄豪傑の偉業が消滅して、その跡に空しく山や丘だけが残ることをいふ。

【長へに日ひを懸く】 藝術上の作品が、長く人心に感化を及ぼして、崇拜の的となることを、日月が天に懸つて光輝を放つてゐるさまに譬へたのである。

【果して】 世人のいふやうにほんたうに。實際に。
【名篇傑作】 茲は、有名な著書や、傑出した作品、の意に解する。
【鼓吹】 心を勵ますこと。激勵して奮起させること。

【本文の引用書】 文學その折々。一冊。文學上の隨筆書。

四二 吾等人間を救済するもの

凡そ吾等八間を救済するものが三つある。第一は文學の力で第二は道德の力第三は宗教の力である。文學は感情によつて直觀的に救済の任務を果さうとし、道德は意志によつて漸進的に救済しようとし、宗教は其の中間に立つて、半面は情により、半面は意志によつて救済せむとするものである。此の三者は此の如く分登る麓の路に於てこそ違へ、つまりは同じ高嶺の月を見むとするものである。かやうに考へれば、其の何れの道によつて救済を求むるも、其の人人の自由であつて、必ずしも、己に同じき者に黨して異なる者を伐つの必要がないことは、明かである。(藤井健治郎)

【直觀的】 〔漸進的〕 〔分登る麓の路云云〕 〔己に同じき者〕

歌意は「麓からの登路は幾筋もあるけれども、頂上によつてしまへば同じ月が見られるのと同様に、各人の取る所の手段方法はちがつて居ても、結局は同じ境地に達し得るのである。」

【己に同じき者に黨して、云々】 黨派を作つて異派の者を攻撃する、意。

【藤井健治郎】 文學博士。倫理學者。嘗て、早稻田大學教授であつたが、今は、京都帝國大學文學部教授。

【本文の引用書】 時代思潮。

大意

吾々人間を救済するものは、文學・道德・宗教の三つである。文學は、吾々の感情に訴へて、直接に吾々を救済し(吾々を忘我の境に導き)、道德は、善を行ひ惡を避けようとする意志の力によつて、次第々々に、吾々を救済し(吾々を善人に近づかしめ)、宗教は、半面は感情(信仰)により、半面は意志(善根を作らうとする心の作用)によつて、吾々を救済して(吾々の魂を淨化させて)くれる。この三者が吾々を救ふ方法・手段には相違があるけれども、つまりは何れも人間救済の爲に存するものである。故に何れの力を借りて我を救はうと、それは各人の自由であつて、お互に排斥し合ふべきではない。

【黨す】
○ 桐生高等工業學校
要旨 吾々人間を救済するものは、文學・道德・宗教の三つであるといふことを論じてゐる。

釋義

【感情によつて】 吾々の感情に訴へて、の意に解く。

【直觀的に】 説明などをしないで直接に感得させるやうな方法で、の意。

【意志によつて】 「直觀」 推理・説明などによらないで直接に外物を感得すること。

【意に解く】 善を行ひ、惡を避けようとする意志の力によつて、の意に解く。

【漸進的に】 次第々々に、の意。

【漸進】 順を追つて進むこと。次第々々に進むこと。

【半面は情により、半面は意志によつて】 半面は感情(信仰)により、半面は意志(善根を作らうとする心の作用)によつて、の意に解く。

【分け登る麓の路云云】 古歌に「分け登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月をこそ見れ。」とあるに據つて、書いたものである。

四三 藝術の士は貴い(一)

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、心安い處へ引越したくなる。何處へ越しても住みにくいと悟つた時詩が出来る。越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい處をどれ程か寛げて、東の間の命を東の間でも、住みよくせねばならぬ。ここに詩人といふ天職が出来、ここに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊かにするがゆゑに貴い。(夏目金之助)

【智に働けば角が立つ】 〔情に棹させば流される〕 〔意地〕 〔寛く〕

【東の間】 〔天職〕 〔使命〕

○ 鳥取高等農林學校

要旨 (一)(二)は「草枕」の一節で、藝術家の天職

を説いてゐる。
(一)は、詩が出来畫が出来る理由と、詩人や畫家などの藝術家の貴いわけとを述べてゐる。

釋義

【智に働けば角が立つ。…あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊かにするがゆゑに貴い】 理智によつてのみ行動しようとすると、とかく理窟がちとなつて、物事が圓滿に行かない。又感情によつてのみ行動しようとすると、とかく正當な判断を缺くやうになるから、思ひがけない横道へそれるやうなことになつて失敗することになる。又自分の意地を張り通して、何でもたゞ自分の思ふ通りにやつて行かうとすると、強ひて無理もしなければならぬから、氣樂にすることが出来ないで、世の中が窮屈になる。何にしても人間の世の中は住みにくいものである。さういふ風に人の世は住みにくいものであるが、その住みにくさがだん／＼ひどくなつて行くと、苦痛に堪へられなくなつて来るから、何處かさういふ苦痛のない氣樂な所へ引越して行きたいと思ふやうになる。ところが生憎何處へ引越してもやはり住みにくいといふ事を悟ると、その時はじめてその境遇から、本當の

詩とか畫とかが出来るのである。さうして、住みにくいから越さうとしても越すことの出来ない此の人の世がどうしても住みにくいといふのならば、他に行き所もないから(外に仕方がないから)、住みにくさを幾分でも少くして、どうせ短い人生を、その短い間だけでも、住みよくしなければならぬ。その場合に、詩人といふ自然的義務が出来、その場合に、畫家といふ天使としての命令が降るのである。すべての藝術家は人の世の中をのんびりとしたものにさせ、人の心をゆつたりとさせるから貴いのである。
「智に働けば」この下に「理窟勝となつて」を補つて解くがよい。(人間の精神活動を智・情・意の三つに分けて見ると、智力に勝つた人は、兎角理智の鋭い閃きのために、萬事に角立(かどたち)がちで治まりがつきにくい。又、感情に脆い人は、兎角涙の川に舟を掉(か)さすことになつて、其の方に押流され易い。又、意志の鞏固な人は、兎角意地を通しがちである爲に、狷介孤獨の窮屈な道を辿らねばならぬ。大抵人はこんな類の何れかに屬するもので、兎角世の中は住みにくいものである。之が、この文の總提で、作者自身の人生觀をエキスにして現はしたものである。)
智、事物を知る心の作用、即ち、智慧。茲では、理智(分別理解の智慧)の意にとるがよい。
「情」事物に感ずる心の作用、即ち、感情。

「意地」思ふことを成し遂げようとする心の作用、即ち、意志。
「とかくに」何にしても。何れにしても。

「悟つた時」この下に「その境遇からして」を補つて解くがよい。

「越すことの」この上に「さうして」を補つて解くがよい。

「寛げて」ゆるやかにする。

「束の間」極く暫くの間。一握程の間の義から轉用したもの。

「天職」自然的の職務。即ち、その人に自然にそなはつてゐるつとめ。生活の便宜上から考へてするやうなつとめではない。

「使命が降る」「天職が出来る」と、同意。

使、命、天使たる命令。天から賦與せられたつとめ。結局、自然的

のつとめ、の意となる。

【夏目金之助】 明治大正の交に於ける文豪。號は漱石。慶應三年

一月江戸牛込喜久井町に生れた。明治十七年建築を學ぼうとして大學神備門の工科に籍を置いたが、後文科に轉じて、二十三年文科大學英文科に入學し、二十六年卒業した。東京高等師範學校・松山中學校・第五高等學校に教鞭をとり、明治三十三年英國に留學を命ぜられ、三十六年歸朝、東京帝國大學文科大學講師となり、英文學を講じた。文科大學在學時代から正岡子規と親交があつて、俳句をよくし、寫生文に長じて居たが、「吾が輩は猫である」を發表してから文名が遽かに揚つた。明治四十年文科大學講

師を辭して、朝日新聞社の招聘に應じて入社し、その創作を朝日新聞紙上に連載した。明治四十四年文學博士の學位を授けられたが辭して受けず、大いに世の注目を惹いた。大正五年十二月九日宿病の胃潰瘍で長逝した。享年五十。著書に、吾が輩は猫である・深虛集・鶉籠・虞美人草・文學論・草合・三四郎・それから・文學評論・滿韓とこゝろ／＼・門・思ひ出す事など・彼岸過ぎて・行人・心硝子戸の中・道草・明暗等がある。それ／＼單行本もあるが、今は全部纏めて、漱石全集(十四卷)中に收められてゐる。(二五二七―二五七六)
【本文の引用書】 草枕。一冊。畫家の旅行記としての小説。

四四 無聲の詩人無色の畫家(二)

住みにくき世から、住みにくき煩(わづら)を引抜いて、有りがたい世界をまのあたりに寫すのが詩である畫である。或は音楽と彫刻である。こまかに言へば、寫さないでもよい。ただまのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌も湧く。著想(ちやうさう)を紙に落さぬと

も瑤鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向つて塗抹せんでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。ただおのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうららかに收め得れば足る。この故に無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縁なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱し得るの點に於て、かく清淨界に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩し得るの點に於て、千金の子よりも萬乗の君よりもあらゆる俗界の寵兒よりも幸福である。

(夏目金之助)

- 〔煩〕 〔詩も生く〕 〔著想〕 〔瑤鏘の音は胸裏に起る〕 〔丹青〕
- 〔畫架〕 〔塗抹す〕 〔五彩の絢爛〕 〔心眼に映る〕 〔かく觀じ得〕
- 〔靈臺方寸のカメラ〕 〔澆季溷濁の俗界〕 〔うららかに收む〕
- 〔尺縁〕 〔煩惱を解脱す〕 〔清淨界〕 〔不同不二の乾坤〕 〔羈絆を掃蕩す〕 〔千金の子〕 〔萬乗の君〕

○小樽高等商業學校
○宇都宮高等農林學校
○海軍兵・機關・經理學校
○京城高等工業學校

要旨 前文の續きであつて、たとへ詩一首作つたこともなく、畫一枚描いたことがなくても、人生を清く美しいものであると考へて享樂し得る者は、富豪の者よりも萬乗の天子よりも幸福であるといふことを述べてゐる。

釋義

【住みにくき世から、住みにくき煩を引抜いて、……あらゆる俗界の寵兒よりも幸福である】 住みにくい世から、住みにくいといふ苦勞だけを引抜いて、いやな事のない有難い世界を目の前に寫し出すのが詩であり、畫であり、又は音楽であり、彫刻である。さうではあるが嚴密にいふと、必ずしもさういふものを寫し出さなくてもよい。たゞさういふ感興を起すものを目の前に見れば、自然そこに詩も出来れば、歌も出来る。胸中に湧いて來た思想は、之を文字によつて表はして紙上に書かなくても、立派な詩は自分の胸中に生じて来る。又繪の具は之を布や絹に塗らなく

ても、美しくきらびやかな五彩の色どりは自然心の中に出来る。たゞ自分たちの住む世の中をかういふものであると考へ悟つて、世の末の濁りけがれた俗物の世界を、我が心に、清くさつぱりとしたものとして考へるやうになし得れば、それでよいのである。かういふわけであるから、無聲の詩人にはたとひ一句がなくても、又無色の畫家には、たとひ一尺ほどの絹に描いた畫がないにしても、かういふ風世の中を考へることが出来るといふ點に於て、又かういふ風に俗世間の苦しみ惱みから、離れ去るといふ點に於て、又かうした穢れた俗世間を超越して自由に清い精神界に遊び得る點に於て、又この二つとない美しい精神的の天地を作り得る點に於て、又俗世間には普通である所の、自分一身の利益だけを考へて却て之に束縛されるといふ愚な事をすつかり拂ひのけてしまふといふ點に於て、かういふ人たちは、非常な金持よりも、尊い天子よりも、其の他すべての浮世の仕合者よりも仕合である。

- 〔煩〕 苦勞。
- 〔詩も生き〕 詩も生じ。
- 〔著想〕 思ひついたこと、胸に浮んだ考。詩歌文章などを作る時に思想を構へることをいふ。
- 〔瑤鏘〕 金石などの打合つて發する聲。美音の形容である。茲は

すぐれた詩文の思想をいふ。よい詩、の意にとる。

〔胸裏に起る〕 心の中によい詩が出来る。

〔丹青〕 赤と青との顔料。轉じて、繪の具、の意。

〔畫架〕 畫をかく時に畫紙又は畫板を支へる爲の臺。茲は、畫架にのせてある畫紙・畫布・畫絹等をさす。

〔塗抹〕 ぬりつける。

〔五彩の絢爛〕 種々の色で彩色した美しさ。

〔五彩〕 本來は、青・黄・赤・白・黒の五色で色どる意であるが、茲は、色々の彩色、ほどの意に解すればよい。

〔絢爛〕 美しくきらびやかなこと。まばゆいほど美しいこと。

〔心眼に映る〕 心の中に生ずる。心を眼にたとへて、心眼といふ。

〔おのが住む世をかく觀じ得て〕 自分の住んでゐる此の世の中を、美しいものであると考へることが出来て、の意。

〔靈臺方寸のカメラ〕 心といふ一寸四方の寫眞機。心に萬象のうつり來ることを、寫眞機の暗箱の中に映じるのにとへたのである。

〔靈臺〕 精神の在るところ。茲は、魂・心。莊子、庚桑楚に「不可レ内ニ於靈臺」となる。

〔方寸〕 心臓の大きさを示したもので、一寸四方。胸中・心、の意。列子、仲尼に「吾見ニ子之心ニ矣、方寸之地虚矣。幾聖人也」とある。

る。

カメラ Camera 寫眞機の暗箱。寫眞機の主要部をなすもの。

「淺季濁濁」世が末になつて人情が薄く人心の濁つてゐること。俗界の形容である。

淺季 末の世。

濁濁 にこる。

「俗界」この世。世間。淨土・天國などに對する語。

「うららか」空のよく晴れて美しいさま。茲は單に、うつくしい、といふほどの意に用ひてある。

「收め」茲は、うつす、といふ程の意。

「無聲の詩人」前に「著想を紙に落さぬとも、云々」といつたのを承けて、詩を文字上に表はさなくても、心中に於て詩人と同様に感じ得る人をいふ。即ち、心中に詩境をゑがくだけで、口外しない詩人。換言すれば、世の中を清く美しいものとして眺め得る人をいふ。次の「無色の畫家」も同じ。

「無色の畫家」之も前の「丹青は畫架に向つて塗抹せんでも、云々」を承けて、畫家ならずして、畫家同様に畫趣を理解する人をいふ。即ち、心中に畫境をつくるだけで、別に繪の具によつて之をあらはさない畫家。

「尺濼」一尺ほどの絹。茲は、畫をかけた絹布。

尺 僅少を意味する。

濼 きぬ・かとりぎぬ。

「かく人生を觀じ得る」この句は、前の「おのが住む世をかく觀じ得て、云々」を承ける句である。

「煩惱」心を苦しめ悩ます妄念。胸のなやみ。精神の煩悶。

「解脱」迷を開き道を悟ること。

「清淨界」罪や汚の全然ない世界。

「出入」自由に行つたり來たりするをいふ。

「不同不二」二つとない。本來は「同じではないが、さりとて別物ではない」といふ義。佛語で、煩惱即菩提といつたやうに、煩惱と菩提とは不同ではあるが、不二である。例へば氷と水とは不同でも不二である。解ければ水、結べば氷といつたやうなものである。住みにくい煩悶の境地と、總てを楽しく思ふ境地とが、即ち不同不二なのである。

「乾坤を建立す」不同不二の心の境界を造ることをいふのである。

乾坤 天地。

「羈絆」ほだし。かゝづらひ。束縛。

「擲擲」拂ひのけてしまふ。

「千金の子」金満家の子。

釋義

【飄然として何處よりともなく來り、……何處より來りて何處に去るかを知らぬ人は、此の聲を聞いてかなしむ】

風といふものは、すうつと何處からともなく吹いて來て、又すうつと何處へともなく吹いて行つてしまふ。そしてどこが初やら、どこが終やらさつぱりわからない。その風が、ものさびしく吹き過ぎると、人に腸を斷つやうな悲哀を感じさせる。あゝ此の風は、無窮から無窮へと過ぎざる此の人生が、聲となつてあらはれたものである。何處から生れて來て、何處へ行くかを知らない吾々人間は、この人生の聲のあらはれたものであるとも見るべき此の風の聲を聞いては、悲哀を感じずにはゐられない。

「飄然」風の吹くさまの形容。

「蕭蕭」ものさびしいさま。秋風などの吹く聲の形容に用ひる。

「腸を斷つ」非常に悲しい思ふすることの形容。

「過ぎゆく人生」悠久無限な宇宙にあらはれ出て、五十年経つたか經たぬかに、何處へか消え去つて行く人生。

「人」この場合は、廣く人間といふ意に用ひてある。吾々人間は、の意。

【徳富健次郎】文章家。小説家。蘆花と號したが、氏は、後半生の

「萬乘の君」天子。戰爭に兵車萬乗を出す絶大な國の君、の意。
「あらゆる俗界の寵兒」金持とか高位高官の人とかをさしていふ。
【本文の引用書】草枕。

四五 風は過ぎゆく人生の聲なり

飄然として何處よりともなく來り、飄然として何處へともなく去る。初なく終を知らず。蕭蕭として過ぐれば、人の腸を斷つ。風は過ぎゆく人生の聲なり。何處より來て何處に去るかを知らぬ人は、此の聲を聞いてかなしむ。(徳富健次郎)

【飄然】「蕭蕭」

【蕭蕭】「腸を斷つ」

【過ぎゆく人生の聲】

要旨 風といふものは、何處から來て何處へ去るかかわからない人生を象徴したもののやうに思はれる。それ故人間は此の風の聲を聞くと、そとろに悲哀を感じるといふことを述べてゐる。

著書からは決してその號を用ひないで、必ず本名を記してゐる。明治文壇の流行兒であつたが、大正に至つてもまだ其の讀者を失はない。明治元年肥後國葦北郡水俣村に生まれた。父一敬は横井小楠の門人である。前國民新聞社長貴族院議員徳富猪一郎氏（蘇峰學人）はその兄である。氏は嘗て京都同志社に學んだが、半途退學し、民友社に入りて、久しく翻譯及び著述に従事した。後、民友社を去るや、小説「黒潮」において、兄と性行全く一致しないので、已むを得ず社を辭した由を告白してゐる。「青蘆集」には、蘇峰に寄せて曰く、「青い雲、白い雲、同じ雲でもわしや白雲よ、我が儘・氣儘に空を飛ぶ。」と。明治三十九年耶蘇聖地から露國ヤスナ、ボリナなるトルストイ翁を訪ひ、歸來、順禮紀行の著がある。その他、自然と人生・泰西名婦鑑・トルストイ・不如歸・思出の記・寄生木・みずのたはこと・黒い目と茶色の目・死の蔭に・新春・竹崎順子等著述頗る多く、皆世に行はれてゐる。而して氏が第二回世界漫遊の途に上つたのは大正八年の春で、聖地を順禮し、次で戦後の歐洲を歴遊し、歸來「日本から日本へ」を出した。最近には小説「富士」の著がある。この二書は夫人愛子との共著としてある。昭和二年伊香保温泉で病歿した。年六十。（二五二八—二五八七）

【本文の引用書】 自然と人生。一冊。自然と人事との文集。

四六 穴を守るの蟹巢を忘るるの鴉

吾人の周囲を見廻せば、爲す可き事、爲さざる可からざる事甚だ多し。然も自ら願みれば、力微にして才足らず。茫茫たる人生、漠漠たる乾坤、殆ど手の著くべきなく、脚の擧ぐべきなし。吾人自ら憂悶を歓迎せざれども、渠は招かざるの客として、勝手に我を襲ふなり。是に於てか、或者は自ら窮屈なる小我の城に立籠り、或者は世界に吞まれて、自己として自己の立場を失ふ。即ち穴を守るの蟹たらざれば、巢を忘るるの鴉なり。（徳富猪一郎）

【小我】 「穴を守るの蟹」 「巢を忘るるの鴉」

○名古屋高峯商業學校

要旨 世に處するに、或は小我を守つたり、或は世界に吞まれて自己の立場を失つたりする事を戒めてゐる。

釋義

【吾人の周囲を見廻せば、……即ち穴を守るの蟹たらざれば、巢を忘るるの鴉なり】我等のまはりを見まはすと、した方がよい事やしなければならぬ事が非常に多い。それでも、自分自身のことを考へて見ると、自分の力は少くして才は十分でない。廣々としてはるかな人間世界や、ばつとしてとりとめない天地に對しては、殆ど取りつきやうもない。其の結果として、我々は、自ら心配や煩悶を好んで求めるわけではないけれども、かの憂悶は、丁度招かないでも向ふから押しかけてくる客のやうに、勝手に我々に押し寄せて來るのである。そこでもつて、或者は、狭い量見になつて、小さな自我を守つて、その範圍を出まいとし、或者は、外界から壓迫されて、自分自身の立脚地を失つてしまふ。即ち自分の居る狭い穴だけを守つて、廣い世界のあることを知らない蟹のやうに小さい自我を張り通すか、さもなければ、自分の巢を忘れて歸る所なくなつた鴉のやうに何等の主義もなく、自分の立場を失つてしまふのである。

【爲さざる可からざる事】 しなければならぬ事をいふ。爲す可き事」を強くいひ表したものである。

【茫茫たる人生】 廣々としてはるかな人世。とりとめない人

世。

「漠漠たる乾坤」 ばつとしてとりとめない天地。

「手の著くべきなく脚の擧ぐべきなし」 どうしてよいやら處置に苦しむをいふ。

「憂悶を歓迎せざれども」 心配や煩悶を歡んで迎へる（好んで求める）わけではないけれども。

「渠」 憂悶をさす。

「招かざる客として」 招かない客が來るやうに。

「我を襲ふなり」 我に押し寄せて來るのである。

「是に於てか」 そこでもつて。

「小我」 差別上の我。小さな自我。たゞ自分一個のことを考へること。

「世界に吞まれて」 世界から吞みこまれて。外界の壓迫をうけて。即ち、我を忘れるをいふ。

「自己として自己の立場を失ふ」 自分自ら自分を忘却してしまふをいふ。

「穴を守る蟹」 小自我を張り通すことを、自分の狭い穴を守つて、廣い世間のあることを知らない蟹にたとへたのである。

「巢を忘るる鴉」 外界にのまれて自己を没却する者を、自分の巢を忘れて歸るところの無くなつた鴉にたとへたのである。

【徳富猪一郎】 文章家。新聞記者。蘇峰と號する。文久三年正月肥後國葦水郡水俣村に生れた。父洪水は横井小楠の高弟であつた。初め熊本の英學校に學び、のち京都の同志社に入つたが半途退學し、將來の日本」を著して文名をあげた。明治二十年二月民友社を起して「國民の友」を創刊し、次いで「國民新聞」を創め、民友社を中心として撲滅界に活動した。明治三十年内務省參事官に任ぜられたが、後辭して歐洲に遊んだ。明治四十三年寺内伯が朝鮮總督となるに及び、朝鮮の新聞經營を託せられて、これが爲に力を致した。のち貴族院議員に勅任せられた。近年筆を呵して積年の宿志たる「近世日本國民史」の著作に従事し、老來筆力いよ／＼旺盛の概がある。大正十二年該著によつて帝國學士院恩賜賞を受けた。昭和四年に國民新聞社を辭して、大阪毎日・東京日日新聞社に入つた。著述としては、將來の日本・新日本の青年・吉田松陰・國民叢書（日暎講壇・生活と處世・文學漫筆・靜思餘錄・寸鐵文藝・斷片等廿餘篇）、世界の變局・時務一家言・元田先生進講録・政治家としての桂公・山水隨緣記・七十八日遊記・兩京去留誌・杜市と彌耳敦・大正の青年と帝國の前途・國民小訓等、その他尙多い。（二五三—）

【本文の引用書】 蘇峰文選。一冊。文學・處世等の文集書。

四七 風雅の嗜ある者

風雅の嗜ある者は、よく自ら容忍することを得。何となれば、其の暗黒なる一面を見ると共に、必ず他の光明なる一面を見ればなり。蓮月尼の歌に曰く、宿かさぬ人のつらさをなさけにて臘月夜の花の下ぶし」と。もしかくの如く觀じ來らば、人生何に處してか自得せざらむ。（徳富猪一郎）

【容忍す】 「暗黒なる一面」 「光明なる一面」 「つらさ」 「なさけ」 「花の下ぶし」

○東京音樂學校

要旨 「風雅論」と題する文の一節で、風雅の嗜の、處世上にもたらす所の効果について述べてゐる。

釋義

【風雅の嗜ある者は、……人生何に處してか自得せざらむ】 風流の道の心得ある人は、怒るべき場合にも、よく自分でゆるし

こらへる事が出来る。何故かといへば、その事柄の憂ふべきいやな方面を見ると共に、きつと楽しい愉快な方面をも見るからである。蓮月尼が、かういふ意味の歌を詠んでゐる。

旅先で日が暮れたので、或家に入つて一夜の宿を乞うたところが、その家の主人は、薄情にもとめてくれなかつた。然し、その薄情な仕打が、わが身には却つて親切をつくして呉れた結果となり、そのお蔭で、今かうして臘月夜に櫻花の下に臥して、よい景色が眺められるのである。

もし世の中の事をば、この蓮月尼のやうに、よい方にだけ解釋して行くならば、人生はどんな事に出くはしても、自ら満足の出来ないといふことはない筈である。

【容忍する】 ゆるしこらへる。

【暗黒なる一面】 憂ふべき方向。

【光明なる一面】 楽しい愉快な方向。

【蓮月尼】 太田垣光古の女。名を誠といつた。年若くして尼となり、京に來つて蓮月と號し、和歌を千種有功に學び、晩年陶器を手製して自作の歌を書いた。人之を珍重した。後、西加茂神光院の茶所に位し、明治八年に歿した。年八十五。著はす所、海女劫藻がある。（二四五—二五三）

【Ours】 薄情と解する。

「なさけ」 人情・風流なども解するが、茲は、親切又は慈悲の意にとる。
 「臘月夜」 古くは、「おぼろづくよ」と詠む。ほのかに霞んだ月の出てゐる春の夜の事をいふ。
 「花」 櫻の花をさす。古文で、單に花といへば、多くは櫻をいふ。
 「觀ず」 茲は、解釋する、といふ意に解くが適切である。普通に、注意して見る・よく考へ思ふ、などの意に用ひる。

四八 精神上的の急須

人は物質上の逼迫にのみ壓せられて、而して後動くものにあらず。その動くや、必ず亦精神上的の急須之に伴はざるはなし。或は之が主たらざるはなし。人或は社會の變革の原因を以て、一一經濟的作用に歸するものあり。蓋し思はざるの甚しきのみ。人は麴麴のみにて生くるものに非ずとの眞理は、個人の上のみに應用すべきものは、社會亦固より此の眞理の支配を免るる能はざる

を見ずや。(徳富猪一郎)

〔逼迫〕〔壓す〕〔動く〕〔急須〕〔經濟的作用〕〔人は麴麴のみにて云云〕〔……ものかは〕〔見ずや〕

○高等學校

要旨 個人及び社會は、物質的よりも寧ろ精神的の要求によつて動くといふことを説いてゐる。

釋義

〔人は物質上の逼迫にのみ壓せられて、……社會亦固より此の眞理の支配を免るる能はざるを見ずや〕 一體、人間といふものは、單に金錢・衣服等の物質上の窮乏にばかり迫られて行動するものではない。その行動するに當つては、必ずやはり精神上的の緊急な要求が、それに伴つてゐる。否寧ろそれが主となつてゐるといつてもよい。以上のことは個人についていはれるばかりでなく、また社會についてもいはれるのである。ところが、世の中には、社會の變り改まる原因をば、すべて經濟的作用、即ち金錢・貨財などを目的として行はれる作用に歸結してしまふ者がある。畢竟淺慮も亦甚だしいものといはなければならぬ。なぜなれば、「人間は、たゞ物質上の糧ばかりで生きてゐるものではなく、更に精神上的の糧をも要する。」といふ眞理は、一個人の事にばかり當

てはめるべきものではなく、社會も亦、當然この眞理の支配を受けずにはゐられないからである。

〔物質〕 精神に對する語。金錢・貨財などの總稱。

〔逼迫〕 さしせまる。窮乏、の意。

〔壓せらる〕 壓制される。支配される。

〔動く〕 行動する。動作する。

〔や〕 此の「動くや」のやは、何々するには、何々するに當つては、などと譯する。

〔急須〕 緊急な要求。須は、求める、意。

〔經濟的〕 金錢・貨財等についての。物質上の。

〔歸す〕 歸結する。歸納する。基づくものとする。

〔蓋し〕 思ふに。要するに。

〔甚だしきのみ〕 此ののみは、たゞこれ位のもの、何々に過ぎない、といふ場合に用ひる語。漢語の助字の「耳」に當る。

〔麴麴〕 技は、衣食・物質などの意。物質上の糧。

〔ものかは〕 反語法。ものであるか、さうではない、と意味が裏返へる。

〔見ずや〕 疑問的反語法。見ないか、見るであらう。此の見るの意味は、心の眼で觀察するのをいふ。猶、此の句の結尾は、前段の理由を説いた所であるから、上に「なぜなれば、」を補つて置

き、結尾を、當然この眞理の支配を受けずにはゐられないからである。」と解くべきである。

【本文の引用書】 蘇峰文選。

四九 時世の興廢

社會の最大部分は、傳聞によりて斷定をなすものなり。若し多少優等の腦力を有するものが、斷定を下すことあらば、世の群集は諺に、「犬吠形百犬吠聲」と云へるが如く、猶猶として附和雷同し、傳播普及、遂に一大潮流を成すに至る。之を譬ふれば、猶斷崖の上より一小石を投ずるに、此の石始は他の小石を伴ひ漸く莫然として幾多の大石を突飛ばし、次第に勢力を倍加して、遂に百千大小の石と共に轟然雷吼して谷底を撃つが如し。總べて社會に於ける潮流は、何人か先鞭を著けて、之が始を爲したるに因由せざるなし。是故に時世の興廢

は自然に一任すべきにあらず。之を興さむと欲せば進んで之を興すべきなり。(井上哲次郎)

【最大部分】 「犬吠形百犬吠聲」 「猶猶」 「附和雷同」 「傳播普及」 「潮流」 「莫然」 「雷同す」 「先鞭を著く」

○高等學校

要旨 先覺者と時世の興廢との關係を説いてゐる。而して、本文の主眼は、「總べて社會に於ける潮流は、」から以下である。

釋義

【社會の最大部分は、傳聞によりて斷定をなすものなり。…之を興さむと欲せば進んで之を興すべきなり】 社會の大多數の人は、自分には物事を斷定する力がなく、傳聞によつてその意見を定めてゐる。即ち、若しもいくらか、優れてゐる腦力をもつてゐる者が出て來て、ある事をかうであると斷定を下すことがあると、世の多數の者は、諺に、「一匹の犬が何かを見て吠えると、澤山の犬は其の聲を聞いて吠える。」といつてあるやうに、わいゝいつて、わけもわからずそれに賛成し、其の説が一般に廣がつて、遂に一大潮流を成すに至るのである。之を譬へると、丁

度けはしいがけの上から、一つの小を投げると、此の小石は始の中は、他の小石を連立つて落ちるが、その中にだん／＼と、がらがらいつて澤山の巨石を突飛ばし、次第に勢をまして、遂に無数の大小の石と共に、雷のやうにとどろいて谷底にぶつかり込むやうなものである。このやうに總べて社會に於ける潮流は、何人かその手始をして、之が始を爲したのに因るのである。かういふわけであるから、その時代の社會を立派なものにしようと思へば、自然のなりゆきにまかせて置くべきものではない。是非とも時世を立派なものにしようと思つたならば、先づ誰か(先覺者)が、先鞭をつけて、一世の風潮をその方へ向け導かなければならぬ。

【最大部分】 最大部分の人。即ち、大多数の人。

【一犬吠形百犬吠聲】 一匹の犬が、何かを見て吠えようと、他の澤山の犬は、此の聲を聞いて吠えるといふので、世人の附和雷同性に富むことを喻へていつたものである。潜夫論に「一犬吠形百犬吠聲、一人傳虚萬人傳實。」とあるに據つて書いたのである。

【猶猶】 犬の吠えるさま。

【附和雷同】 自分には確かな意見がなくて、徒らに他人の意見に従ふこと。

【傳播普及】 廣くひろがり、あまねく行きわたる、の意。

【潮流】 「風潮」に同じ。世のなりゆき。時勢のおもむき。

【斷崖】 けはしいがけ。
 【轟然】 石と石とがぶつかりあつて立てる音の形容。轟、俗字「戛」。
 【轟然】 とどろきひびくさま。轟、ガウ(慣用音)。
 【雷同】 雷のやうに吼える、意。大きな音の形容。
 【先鞭を著く】 真先に事をする事。手始をすること。
 【因由す】 よる。もとづく。
 【時世の興廢】 その時代の社會を立派なものにすること。
 【時世】 其の時代。時代。
 【興廢】 「盛衰」と同じ意味であるが、此の場合は、興にのみ意味をとると見るがよい。

【井上哲次郎】 哲學者。文學博士。巽軒と號した。筑前太宰府の人である。安政二年十月に生れた。開成校・東京大學に學び、哲學、政治學を修めた。明治十三年に卒業した。明治十七年に、哲學研究の目的を以て留學し、獨逸のハイデルベルヒ・ライプチヒ・柏林等の諸大學及び佛國巴里大學等に學んだ。二十一年一月に、柏林の東洋語學校に於て、日本神道を講じて名聲を博した。二十三年に歸朝し、帝國大學文科大學教授に任ぜられ、文學博士の學位を授けられた。爾來、其の職にあつて、身を倫理・哲學の研究に委ね、子弟の指導に勤め、學界の爲に盡す所が多い。蓋し一代の儒者である。著す所、哲學字彙・教語衍義・巽軒論文集・日本陽明學

派の哲學・日本古學派の哲學・日本朱子學派の哲學・學生實錄・倫理と教育等其の他尙多い。(二五一五)

【本文の引用書】 巽軒論文集。一冊。哲學・歴史・文學等の論文集。

大意

社會の大多數の人は、自分には定見がなくて、傳聞によつて意見を定めるものである。そこで少し偉い人が、かうだといふと、世の群集は皆、それに、わけもわからず賛成して、其の説が廣くひろがり、遂に一大風潮をなすことになる。そこで社會を盛んにしようと思つたら、自然の成行にまかせて置かないで、先づ先覺者が、先鞭をつけて、一世の風潮を其の方へ向け導くことが必要である。(大意の場合には、小石を投ずる例語は取入れる必要はない。)

五〇 社會は一個の活物なり

凡そ社會は、一個の活物にして、その精神その思潮は、歲月と共に變化するものなり。個人の性格をして、之に伴ひて變化しゆかしめば可、苟も變化することなくんば、早晚世と相背離して、失墜すること

となきを保せず。(中村孝也)

【背離】 「失墜」

【要旨】 各人各個の性格は、社會の精神や思想につれて變へてゆく様にならねといふ事を説いてゐる。

釋義

【凡そ社會は、一個の活物にして、……早晚世と相背離して、失墜することなきを保せず】 一體、社會といふものは、一つの活きてゐるものであつて、その社會の人々に共通な精神や一般の思潮は、年月と共に變つて行くものである。それ故吾人が個々の性格をば、社會の精神や思想につれて變へてゆくやうにすればよいが、かりそめにも、變へて行かなかつたならば、遅かれ早かれ、世の中と背き離れて、まづい結果になるであらう。自分はいふならぬといふは、保證されないものである。

【思潮】 その時代に於ける一般の思想をいふ。

【背離】 そむきはなれる。

【失墜】 うしないおとす。茲は、まづい結果になる、と解く。

【中村孝也】 文學博士。歴史家。史料編纂官。

【本文の引用書】 未詳。(識者の示教を俟つ。)

標準問題 國文新鈔教授資料 下篇(現代文)終

Faint, mostly illegible text from the reverse side of the page, appearing as bleed-through or ghosting.

標準問題 國文新鈔教授資料

昭和四年十二月二十日發行
昭和五年六月廿八日發行
昭和七年四月廿六日發行
昭和九年三月三十一日發行



編者 發行者 發行所 印刷者

光風館編輯所
東京市神田區神保町一丁目五番地
上原才一郎
東京市神田區神保町一丁目五番地
光風館書店
(電話) 田三〇八七番
(振替口座) 東京三二七番
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舎
根本力三

非賣品

光風館編輯所編

標準問題 國文新鈔

標準問題 國文新鈔教授資料

洋裝全壹册
和裝全三册
(非賣品)

